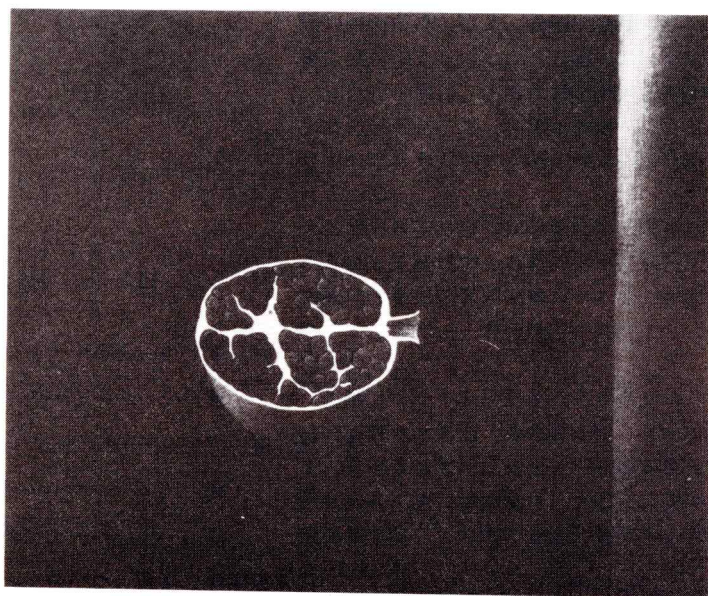


みる・かたる・つくる

千葉県立美術館年報

昭和53年度

CHIBA PREFECTURAL MUSEUM OF ART



ざくろ 浜口陽三

目 次

ご あ い さ つ	1
沿 革	2
管 理 運 営	3
機 構	4
施 設	9
浅井忠像建立事業	13
事 業 報 告	15
常 設 展	16
特 別 展	19
企 画 展	26
千葉県芸術祭	34
団 体 展	36
調査・研究	41
教育・普及	43
昭和53年度事業一覧	52
利 用 状 況	54
日 誌 抄	55
関 係 令 規	56

ごあいさつ

昭和53年度も関係各方面の御協力をいただき、展覧会をはじめ各種講座等について、いっそう内容の充実とその普及に努めてまいり、ここにその成果を年報として御報告する運びとなりました。本館も開館以来4年5ヶ月めに当る昨年度末に、延入館者が53万人に達し、漸く、本館の存在と利用が県民の間に定着されてきた感がいたします。

待望の県民アトリエの実施設計が完了し、昨年度末には槌音高く工事が着工されました。建設に当たっての基本的な機能として①美術実技センターとして。②美術学習センターとして。③美術情報センターとして。④利用交流センターとしての以上4項目があげられました。今後は美術関係者は勿論、広く県民の皆様様の美の広場として、気軽に利用していただき、県民文化の振興に役立つようにしたいと思っています。

また昨年度は、千葉県美術展覧会が30回目を迎え、その記念事業の一環として、各界の御協力により浅井忠像の建立とその周辺の植栽も行われ、美の殿堂にふさわしい環境づくりがなされました。

1970年代後半は、わが国の公立美術館・博物館の建設ブームとも言える時代で、各都道府県は競って堂々たる館を造り、美術館では世界の名作を購入するなどの話題が提供されています。そうした中で、一方「地方の時代」ということが言われ始めました。

このような今日の動きをみるにつけ、この地方の時代の推進役の一翼を美術館・博物館が担っているのではないかと考えます。もとより文化は各地方の個有の風土で生まれ、それらを背景に生れてきた美術館は、大都市に集中している国立・私立の美術館とは、また別の意味で価値ある存在ではないかと思えます。

本館も開館以来、房総ゆかりの作家と作品の発掘、顕彰に努めながら、特色ある展覧会を開催する一方、各種普及事業を企画し、これからの公立美術館のあり方を求めています。これらが本県の芸術文化の振興とともに、「地方の時代」の一翼を担えればと願っています。

今後とも関係機関、団体をはじめ、県民の皆様様のなご一層の御指導と御支援を切にお願いして、昭和53年度の御報告といたします。

昭和54年6月

千葉県立美術館長
市 原 正 夫

沿革

概要

千葉県立美術館は、昭和43年にまとめられた県立博物館設置構想に基き、建設計画をすすめ、昭和48年4月教育庁文化課に美術館準備班を置き、開館事務にあたった。同49年3月第1期工事の展示棟が完成し、4月1日千葉県立美術館として機関設置し、10月23日開館式を挙げ、一般公開を始めた。同51年2月第2期工事の管理棟が完成した。

なお、千葉県の第5次総合5ヶ年計画により、第3期工事として、県民アトリエの建設に昭和54年3月27日着工した。

運営方針

- 県民のための美術館として、明るい親しまれる美術館。
- 学校教育・社会教育との関連から、教育普及活動を重視し、楽しく学べる美術館。
- 県民と美術家との交流の広場とし、相互の理解と向上を図る美術館。
- 房総の地にかかわりのある作家の作品と、関係資料の収集と研究をめざす美術館。
- 美の広場として、広く美術資料・情報等を収集し、みる・かたる・つくる活動を総合的に展開す美術館。

昭和44年12月9日 第1回千葉県立美術館建設懇談会が開かれる(委員15名)

昭和45年1月19日 県立美術館建設の請願書が2月県議会で採択される

昭和45年7月24日 建設地として千葉公園に内定する

昭和45年11月12日 第1回美術館設置準備専門委員会が開かれる(委員10名)

昭和46年3月31日 千葉公園敷地の美術館基本構想成る

昭和46年6月24日 体育館移転問題等で千葉公園内建設が不可能となる
代案として千葉中央港埋立地が提示される

昭和47年1月5日 建設地を千葉中央港の埋立地に決定し、使用について開発庁長と教育長で覚書を交換する

昭和47年3月31日 基本設計完了する 株式会社大高建築設計事務所

昭和47年7月31日 展示棟 第1期工事 の実施設計完了する

昭和47年10月13日 展示棟建築工事請負契約議案可決される

昭和47年12月10日 展示棟建築工事着工(管理・大高建築設計事務所、施工・株式会社竹中工務店)

昭和48年4月1日 文化課に美術館準備班を置き、開館事務にあたる

昭和48年11月30日 管理棟 第2期工事 の実施設計完了する

昭和49年3月31日 展示棟建築工事竣工

昭和49年4月1日 千葉県立美術館発足する職員14名

昭和49年10月23日 開館記念式典を行なう

昭和49年10月24日 開館記念展「千葉県美術展覧会」を開催 一般公開を始める

昭和50年3月13日 管理棟建築工事請負契約議案可決される

昭和50年3月15日 管理棟建築工事着工(管理・大高建築設計事務所、施工・株式会社竹中工務店)

昭和51年2月15日 管理棟建築工事竣工

昭和51年3月2日 管理棟完成記念特別展「浅井忠とその師弟展」を開催する

昭和51年6月7日 寄付によって、正面玄関に植栽を行なう

昭和52年3月12日 彫刻の屋外展示をはじめる

昭和52年4月10日 展示棟の一室に美術普及室を開設する

昭和53年1月18日 外構工事として、駐車場が拡張され、101台の収容となる

昭和53年2月21日 美術普及棟の準備会が発足する

昭和53年10月17日 債務負担行為によって美術普及棟建築予算がつく

昭和53年11月18日 浅井忠像 完成除幕式

昭和53年11月30日 美術普及棟実施設計完了する

昭和54年1月8日 美術普及棟を県民アトリエと改称する

昭和54年3月5日 県民アトリエ建築工事請負契約議案可決される

昭和54年3月27日 県民アトリエ建築工事着工
(管理・大高建築設計事務所、施工・株式会社竹中工務店)

管 理 運 営

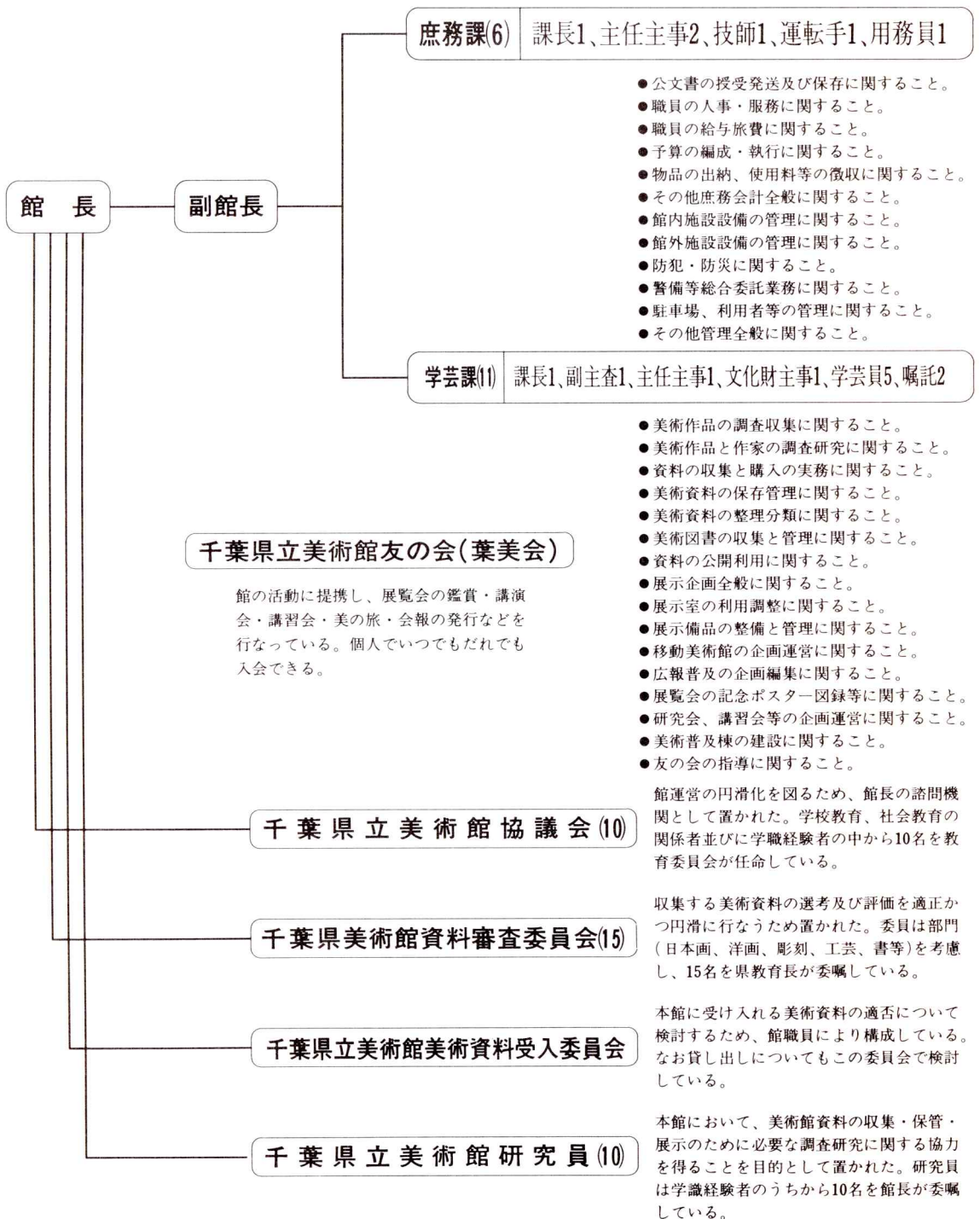
開館以来、4 年余「みる・つくる・かたる」の各種事業を通して、本館の存在も県民の中に定着し、入場者数も53年度末現在 535,035 人と50 万人を突破して、年々利用度を高めている。

施設は、展示棟・管理棟につづき、かねてからの念願であった美術普及棟建設も実施設計が終り、いよいよ「県民アトリエ」として昭和54年3 月末より建築工事が順調に始まった。これにより「みる」だけの美術館でなく「かたる・つくる」の事業も本格的に活動し、県民の方々により一層利用していただけることと思う。

また平日は美術館行の直通バスがないことで利用者の方々に不便をかけているが、現在平日も運行すべき具体的な検討がなされている。

美術館資料の収集状況も、収蔵品目録として刊行され、より充実した資料収集を行うよう調査研究を進めている。今後も事業の充実・発展を図り、美術館の使命をはたすべく、明るく、楽しい美の広場となるよう努めたい。

組織および事務分掌（54.3.31現在）



職 員

館 長 市 原 正 夫
副 館 長 高 橋 在 久

庶務課

課 長 坂 本 雅 生
主任主事 川 野 仁
" 菅 井 富美子
技 師 矢 部 喜 信
運 転 手 篠 原 恒 雄
用 務 員 長 島 則 子

学芸課

課 長 木 木 衛
副 主 査 鶴之澤 康 雄
主任主事 宮 内 忠 昭
学 芸 員 中 村 哲
" 小 野 禮 子
文化財主事 宮 内 速 男
学 芸 員 藤 川 正 司
" 前 川 公 秀
" 佐久間 文 孝
非常勤嘱託 石 井 秀 雄
" 青 木 了

協議会委員

氏 名	役 職	氏 名	役 職
相川 勝衛	千葉県高等学校長協会会長 千葉県立千葉東高等学校長	○鈴木民三	千葉県立美術館友の会長 千葉市教育委員会教育委員長
◎浅見喜舟	和 洋 女 子 大 学 教 授 千 葉 県 美 術 会 長	鈴木 秀一	千 葉 市 教 育 委 員 会 社 会 教 育 部 長
遠藤 健郎	画 家	野口 貞子	千 葉 市 婦 人 グ ル ー プ 連 絡 会 役 員
金子 量重	大 妻 女 子 大 学 講 師	牧田 茂	白梅学園短期大学教授
笹岡 了一	千 葉 県 美 術 会 理 事 長	八代 進	千 葉 県 小 学 校 長 会 長 千 葉 市 立 新 宿 小 学 校 長

◎議長 ○副議長

千葉県美術館資料審査委員会委員

氏 名	役 職	部 門	氏 名	役 職	部 門
植村鷹千代	美 術 評 論 家	洋 画	中村傳三郎	美 術 評 論 家	彫 刻
金子 量重	大妻女子大学講師	工 芸	久富 貢	跡見学園女子大学教授	日 本 画
嘉門 安雄	ブリヂストン美術館長	洋 画	細野 正信	東京国立博物館学芸部 美術課 主任研究員	日 本 画
陰里 鉄郎	東京国立文化財研究所 美術部 主任研究官	洋 画	堀江 知彦	二松学舎大学教授	書
桑原 住雄	筑波大学教授	彫 刻	本間 正義	国立国際美術館長	彫 刻
弦田平八郎	神奈川県立近代美術館 学 芸 課 長	日 本 画	前田 泰次	東京芸術大学教授	工 芸
友部 直	共立女子大学教授	工 芸	松下 英麿	美 術 評 論 家	書
			平野元三郎	千 葉 県 嘱 託	書

千葉県立美術館研究員

氏 名	役 職	氏 名	役 職
飯 田 能 弘	旭市立第一中学校教諭	高 橋 達	千葉県立小金高等学校教諭
池 田 伊 予	千葉市立末広中学校教諭	辰 野 隆	銚子市立銚子西高等学校教諭
石 倉 総 子	千葉市立花園中学校教諭	田 辺 勉	千葉県立生浜高等学校教諭
岩 沢 いづみ	千葉市立轟町中学校教諭	利 倉 栄 子	千葉市立幕張中学校教諭
小 倉 博	成田山史料館研究員	渡 辺 真 弥	木更津紅陵高等学校教諭

昭和53年度予算概要

(単位 千円)

事 業 名	予 算 額	事 業 概 要
運営費(人件費除く)	91,680	館の維持・管理・運営
広 報 普 及 費	3,040	館報発行・講習会等
特 別 展 費	11,600	特別展 3 事業
平 常 展 費	6,025	企画展・常設展 5 事業
設 備 整 備 費	33,000	資料・図書・展示備品
建 設 費	11,500	県民アトリエ実施設計料
計	156,845	

収蔵資料 (昭和54年 3 月31日現在)

収蔵別内訳

種別	区分	保管換	購 入	寄 贈	合 計
日 本 画		2 3	2 3	4 3	8 9
洋 画		3 5	7 6	1 1 1	2 2 2
彫 塑		1 0	2 0	1 4	4 4
工 芸		9	2 6	1 2	4 7
書		1 4	1 3	6	3 3
版 画		3	6 1	3 6	1 0 0
合 計		9 4	2 1 9	2 2 2	5 3 5
研 究 資 料		7 3	8 6	1 9 3	3 5 2

昭和53年度新収蔵作品一覧

日 本 画

番号	作 家 名	作 品 名	制作年	材 質・形 状	寸 法	受入方法
1	岩 崎 巴 人	海流の中に立つ裸女	昭42	紙 ・ 着 彩	208.0×150.0	寄 贈
2	"	波 濤 岩 礁 図	昭49	"	191.5×129.5	"
3	酒 井 重 人	冬	昭12	紙 ・ 着 彩	150.5×135.5	寄 贈
4	"	垣	昭25	"	127.0×164.0	"
5	"	山	昭26	"	152.0×187.0	"
6	"	晩 秋	昭27	"	170.0×199.5	"
7	"	茶 室	昭28	"	172.0×247.0	"
8	"	太 海	昭29	"	154.0×217.5	"
9	"	樹	昭30	"	173.0×217.0	"
10	高 畑 郁 子	メスティーリの女達	昭52	紙 ・ 着 彩	121.3×181.7	購 入
11	戸 田 康 一	風 化	昭53	紙 ・ 着 彩	130.4×487.0	購 入
12	東 山 魁 夷	秋 深	昭50	紙 ・ 着 彩	149.0×199.5	寄 贈
13	峯 岸 魏山人	九 十 九 谷	昭51	紙・墨画 屏風2曲1隻	132.5×149.4	寄 贈
14	渡 辺 学	夜 明 け	昭51	板 ・ 着 彩	210.5×301.5	寄 贈

洋 画

番号	作 家 名	作 品 名	制作年	材 質・形 状	寸 法	受入方法
1	浅 井 忠	老 母 像	明39	油 彩・キャンバス	81.0× 60.0	購 入
2	"	貔子窩第二軍司令部	明27	水 彩 ・ 紙	23.2× 33.6	"
3	"	金 州 城 壁 上	明27	"	20.5× 41.0	"
4	池 田 満寿夫	作 品	昭33	水 彩 ・ 紙	47.2× 28.0	購 入
5	瑛 九	鳥	昭31	水 彩 ・ 板	24.5× 33.5	購 入
6	円城寺 昇	杜	昭12	油 彩・キャンバス	167.5×257.8	寄 贈
7	"	岩		"	91.0×116.5	"
8	"	崖	昭 6	"	80.5×100.0	"
9	久保木 彦	夢 の 詩	昭53	油 彩・キャンバス	91.3×116.7	購 入
10	菅 谷 元三郎	母 の 像		油 彩・キャンバス	159.5×129.5	寄 贈
11	"	恩 師 の 像		"	45.5× 38.3	"
12	時 田 幸 彦	ピ サ の 斜 塔	昭52	油 彩・キャンバス	116.7× 81.0	購 入

彫 塑

番号	作 家 名	作 品 名	制作年	材 質・形 状	寸 法	受入方法	
1	木 村 賢太郎	うごめくトルソーⅡ	昭49	石	彫	85.0	購 入
2	郡 司 和 男	天 使	昭53	石	膏	47.0	寄 贈
3	〃	天 使	〃	ブ ロ ン	ズ	〃	〃
4	〃	詩 人 の 肖 像	昭51	石	膏	95.0	〃
5	〃	詩 人 の 肖 像	〃	ブ ロ ン	ズ	〃	購 入
6	鈴 木 徹	婦 雲 ・ 春	昭53	石	彫	90.0	購 入
7	鈴 木 徹	存 在 す る 私	昭51	木	彫	人体各173.0 かつ22.0	購 入
8	中 島 幹 夫	風 の 肖 像	昭50	石 ・ ガ ラ	ス		購 入
9	長谷川 昂	安 息	昭41	木	彫	161.0	購 入
10	〃	釈 迦	昭51			155.0	購 入
11	〃	大 迦 葉	〃	〃		94.0	寄 贈
12	〃	阿 那 律	〃	〃		95.0	〃
13	〃	富 楼 那	〃	〃		98.0	〃
14	〃	迦 旃 延	〃	〃		93.0	〃
15	〃	優 婆 離	〃	〃		95.0	〃
16	〃	羅 睺 羅	〃	〃		97.0	〃
17	〃	舎 利 弗	〃	〃		96.0	〃
18	〃	目 犍 連	〃	〃		97.0	〃
19	〃	阿 難	〃	〃		98.0	〃
20	〃	須 菩 提	〃	〃		96.0	〃

工 芸

番号	作 家 名	作 品 名	制作年	材 質・形 状	寸 法	受入方法
1	藤 田 喬 平	飾 篋 朱 雀	昭53	ガ ラ ス	高さ17.0	購 入

書

番号	作 家 名	作 品 名	制作年	材 質・形 状	寸 法	受入方法
1	小 安 花 邨	バ イ ロ ン の 言 葉		紙 ・ 墨 書	109.0×75.0	寄 購

版 画

番号	作 家 名	作 品 名	制作年	材 質・形 状	寸 法	受入方法
1	池 田 満寿夫	出 来 事	昭37	銅 版 ・ 紙	36.5×35.5	購 入
2	〃	閉ざされた夜のために	昭41	石 版 ・ 紙	各52.3×39.3	〃
3	〃	飾 り 窓 の 中	昭38	銅 版 ・ 紙	39.5×34.5	〃
4	〃	ス フ ィ ン ク ス	昭45	〃	40.5×35.0	〃
5	〃	夜 の 旅	〃	〃	45.5×40.0	〃
6	小 野 具 定	漁 夫	昭52	銅 版 ・ 紙	40.5×53.8	寄 贈
7	〃	北 の 海	〃	〃	54.8×40.0	〃
8	〃	加 工 場	〃	〃	39.6×54.5	〃
9	富 田 文 雄	森 75 ー 20	昭50	シルクスクリーン・紙	88.0×67.7	購 入
10	〃	接 合 77 ー 25	昭52	〃	59.5×78.8	〃
11	浜 口 陽 三	ざ く ろ	昭33	銅 版 ・ 紙	29.3×34.0	購 入
12	〃	ポ プ ラ	昭36	〃	19.3×26.5	〃
13	〃	顔	昭29	〃	11.5× 8.5	〃
14	〃	西 瓜	昭30	〃	8.5×13.3	〃

番号	資 料 名	受入方法
1	浅 井 忠 関 係 資 料 黙語居士13回忌追悼会記念歌 他 池辺義象他 大正 8	寄 贈
2	宮 崎 丈 二 資 料 油彩画「残雪」 昭31	寄 贈

この建物は、幾つかの建設候補地の中から、千葉港に隣接した臨海埋立地の一角に計画された。計画着手時はこの付近は訪れる人も少なく、海を通して石油基地のタンク群や工場と煙を吐き出す煙突が望める環境であった。

このような当初の環境下で、空気汚染、降下媒塵そして塩害など、建物に与える悪影響が予測されるために、材料の選択、構法、空調計画等は十分な検討がなされた。以下、主な部分について記す。

外壁の打込みタイル—先積ブリック構法

従来の外壁をコンクリートで表現している建物とは異なり、炉器質タイルを型枠代にしてコンクリートと一体に打ち込む構法をもちいた。

今回使用したタイルは従来の断面と異なり、コの字型の断面をしており、型枠にセットせずモルタルにて積上げられるように見込み寸法を5cmの厚味にしてある。

施工方法は、内型枠、配筋工程の次のタイルを積み5段毎に型枠のホームタイを通し、2.400mm程度まで積み上げ単管にて固定する。この2.400mmの高さは、設計段階での試作実験にて安全を確認した数値である。試作段階での支保工は、縦方向に角材を400ピッチに通し、横方向に単管を480ピッチに通し固定したが、施工時は、縦方向に単管を480ピッチに通して固定した。コンクリートの打設は、1.5m～2.0m/hの速度を目標に行ない、ポンプにて打設可能な程度までスランブを下げた。この工程を繰返しタイル壁面を構成してゆく。

タイル面の施工時の汚れ防止には、ふのりを塗布した。タイルの目地は積み上げる工程で仕上げられ、表面に現われない目地の空隙にコンクリートのノロが滲み込んでゆき、目地からの滲透水を防ぎ満足する状態に仕上がった。

屋根の天然スレート

前述のような環境のもとで、勾配屋根に適し、十分にもちこたえられる材料としては耐候性鋼等が考えられたが調査の結果により天然ストートを使用した。

空調計画

計画当初より、良好とはいえない外部環境から美術品をいかに保護するかが、海浜に建つ美術館として、ひとつの重要なテーマだった。外気取入れは、内部に自動巻取りフィルター、ユニット型フィルター、活性炭フィルター、キャビラリーワッシャーの4種類の空気清浄フィルターを組込んだ外気処理器を通して供給

されている。

展示棟はCAV（定風量型）+VAV（可変風量型）方式により計画されている。わが国の美術館は、平常の館内利用者に対して特別展や団体展等のときに非常に利用者がふえて、発熱負荷の変動が大きくなる。VAV方式は、こういった条件に対して非常に効果的であるといえる。

管理棟は、エネルギーの省力化にも役立つVAV方式を採用し、収蔵庫は、露点再熱制御方式により二つの条件の異なる収蔵庫を2台の空調機で空調されている。

照明計画

展示壁面は、自然光源と人工光源とにより全体計画されている。

自然光源は展示室の高窓から取り入れられ、外部の溝型ガラスと内部の紫外線吸収のアクリル拡散板を経て壁面に達する。しかし、太陽直射光の鉛直面照度は8時から15時の間で10%の時間が80.000lx以上、30%の時間が50.000lx以上、50%の時間が25.000lx（平均）以上、90%の時間が5.000lx以上という測定値がありまた水平面照度にしても50.000lx（薄晴）から5.000lx（曇天）の範囲と非常に明るい。このように必要以上に明るい光源は、調光通路内に設けられた2板の電動スクリーン（これは、計算値により鉛直面照度60.000lx以上の条件のとき必要な枚数で、それぞれ異なった透過率を有する布を使用した）にて基準の壁面照度になるよう調光される。

計算値による透過率をもつクロスでの何回かの現場実験の結果、クロスは白地のポリエステル（透過率53.6%）と黒地のジョーゼット（透過率35%）の2枚を採用した。ここで留意すべき点は、クロスの遮光性能を良くするために、厚地の布や、コーティングされた布を使用すると壁面に色がつくことがある。壁面の照度分布の状態は、視覚的に均一な壁面が確保できた。

曇天・雨天に対しては、蛍光灯と白熱灯を補助照明として設置した。蛍光灯と白熱灯を併用したのは、演色性を高めるためである。

第1、2展示室は、すべて蛍光灯と白熱灯による人工光源で計画されている。壁面照度は、最高200lxに押えてある。

固定ケースは基準照度を180lxに設定した。照明方法は、全面アルミルーバーの天井ふところに蛍光灯を2本並列させ、その間に白熱灯2個を配置した。

【設計監理者】

建築：大高建築設計事務所

構造：木村俊彦構造設計事務所

設備：科学応用冷暖研究所

備品：大高建築設計事務所

【施行者】

建築：(株)竹中工務店

設備：空調＝東洋熱工業(株)，衛生＝第一管工事(株)，
電気＝関東電気工事(株)

備品：天童木工，山口木材，佐々木ブラインド

【設計期間】

基本設計：昭和46年11月～昭和47年1月

実施設計：1期展示棟＝昭和47年7月～昭和48年1月
2期管理棟＝昭和48年7月～昭和48年11月

【施工期間】

1期展示棟：昭和48年4月～昭和49年3月

2期管理棟：昭和50年4月～昭和51年2月

【階 数】

地下1階，地上2階，塔屋1階建

【高 さ】

基礎底まで：GL－5.00m，最高軒高：展示棟＝
GL＋4.88m，管理棟＝GL＋9.33，最
高高さ：GL＋15.20m

【都市計画地域指定】

用途地域：準工業地域

【規模・面積】

敷地面積：33,057.87㎡，建築面積：6,191.85㎡，建
ぺい率：18.73%，延床面積：7,469.19㎡，展示棟＝
5,194.59㎡，管理棟＝2,274.60㎡，施工延面積：
7,469.19㎡，駐車台数：101台

【構 造】

主体構造：鉄筋コンクリート造（プレストレスト導
入），屋根：鉄骨造／主鋼材の種類：H型，山型，平
鋼＝SS41および高張力鋼，PC鋼棒／コンクリー
トの種類：A種・普通コンクリート（基礎・地中梁
・1階スラブ） $F_c=210\text{kg}/\text{cm}^2$ ，B種・軽量コンクリ
ート（梁・スラブ用・地上部） $F_c=300\text{kg}/\text{cm}^2$ ，C種
・軽量コンクリート（地上部躯体でA，B以外の注
・壁など） $F_c=240\text{kg}/\text{cm}^2$

【外部仕上】

屋根：勾配屋根＝アスファルトルーフィング・コロ
シート，天然スレート3枚葺，陸屋根＝アスファル
ト防水，押えコンクリート，豆砂利打込み

外壁：煉瓦質タイル（先積ビリック打込工法）一部
コンクリート打放しおよび研り仕上げにウエテキシ
ン塗布

開口部：昭和鋼機(株)オーダーメイド自然発色サッ
シュ，一部型鋼グラファイト処理サッシュ，旭硝子
スーパーサンゴールド

【内部仕上げ】

玄関ホール・ロビー・第7展示室：床・巾木＝自然

石（北木島御影）円盤摺および本磨，壁＝コンクリ
ート砕り仕上げ，プラスター中塗り地塗装仕上げ，
天井＝岩綿吸音板 天井高＝2,300 4,200～13,500
展示室：床＝ビニールホモジニアスタイル，壁＝石
綿珪酸カルシウム，板下地クロス張り，塗装仕上げ
天井＝岩綿吸音板，塗装仕上げ 天井高＝3,600
3,240 4,500～6,100

事務室：床＝ビニールホモジニアスタイルおよびビ
ニールアスベストタイル，壁＝プラスター中塗り地
塗装仕上げ，天上＝岩綿吸音板塗装仕上げ，天井高
3,400

収蔵庫：床＝フローリングブロック，壁・天井＝米
杉 天井高＝3.400 館長・副館長室・応接室：＝ヒ
ューたん，壁＝突板練付け，天井＝岩綿吸音板 天
井高＝2,600

【昇降機設備】

荷物用エレベーター（三菱エレベーター）：制御方
式＝交流2段速度歯車式，セレクトィブコレクティ
ブ(DWA)F操作方式，規模：容量3,000kg，カゴ
内法＝3,000×3,000×3,000，速度＝30m/min，戸閉
型式＝電動式2板戸上下開き

【空調設備】

空調方式：展示棟＝CAV（定風量型）＋VAV（可
変風量型）方式管理棟＝VAV方式，保管庫＝露点
再熱制御方式

熱源：空気熱源スクリュエ熱回収ヒートポンプ方式

【衛生設備】

給水：ポンプ圧送方式，引込み管径80mm

排水：汚水・雑排水合流方式系統（管径300），雨水
系統（管径300）別，公設本管へ放流

【電気設備】

受電放式と契約容量：交流 3相3線式 6,000V
50Hz，電灯幹線＝交流 単相3線式200V/100V
50Hz，分岐支線＝単相2線式200V/100V 50Hz，分
力幹線および分岐支線＝交流 3相3線式200V 50Hz
電話交換方式：20回線クロスバー完全共通制御分散
中継方式

【防災設備】

排煙方式：自然排煙，機械排煙（第1,2,7展示室）
消火方式：屋外・屋内消火栓，不燃性ガス消火設備
ハロゲン1301（電気室，機械室，収蔵庫1,2）

自家発電：ディーゼル機関直結交流発電機，定格出
力100kVA

【その他の設備】

防犯設備：ITVカメラ設備，防犯警報装置，調光放
送設備，火災報知設備

工期及建設経費

第1期工事（展示棟）

工期 昭和47年9月20日～昭和49年3月31日

工事費 775,967千円

本体工事	425,230千円
電気設備工事	79,663千円
空調設備工事	166,493千円
給排水衛生設備工事	28,995千円
外構工事	67,705千円
ガス工事	7,881千円

設計管理料 29,613千円

第2期工事（管理棟）

工期 昭和50年3月1日～昭和51年2月20日

工事費 453,800千円

本体工事	305,500千円
電気設備工事	30,000千円
空調設備工事	79,000千円
給排水衛生設備工事	19,514千円
外構工事	17,786千円

県民アトリエ

懸案であった美術普及棟建設については、関係機関ならびに各界の御協力によって、名称も新たに「県民アトリエ」として、着工の運びとなった。昭和55年の新年早々には完成し、県民美術サロンとして全国的にも特色ある施設として注目を浴びるであろう。

単に“みる。”だけの美術館ではなく、“かたる。”“つくる。”と総合的で動的な美の広場の運営をモットーとして、展示棟、管理棟、県民アトリエの3棟が三位一体となるよう考慮されている。

建設に当たっての基本理念としては次の4項目があげられている。

①県民の美術実技センターとして

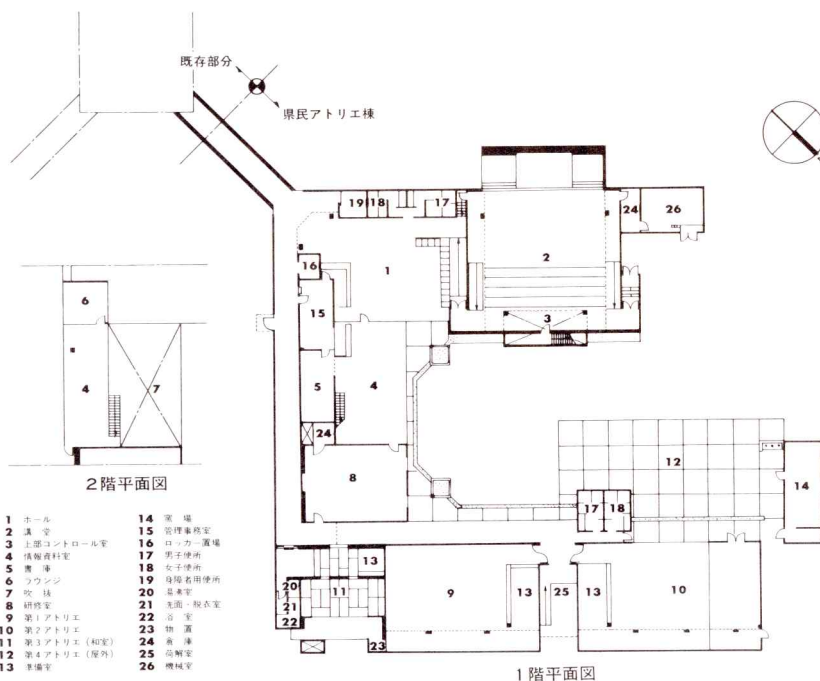
②県民の美術学習センターとして

③県民の美術情報センターとして

④県民の美術振興センターとして

なお、各室については、実技部門として、第1・第2・第3・第4アトリエ、学習部門として、講堂、研修室（視聴覚室）、情報部門として、情報資料室（閲覧・視聴・書架・資料・職員コーナー等）、振興部門として、ロビー・談話室・休憩所・事務室、その他等となっており、総面積は1502㎡である。

なお各室で行われる事業内容や実施計画の具体的なものは、早急に検討し、広く県民の方々に楽しい美の広場として提供し得よう努力していきたい。



展 示 棟

玄関ホール	102.40	m ²	第三休憩室	23.04	m ²
クローク	91.80	m ²	便 所 A	30.24	m ²
倉 庫 A	2.70	m ²	〃 B	23.76	m ²
〃 B	2.70	m ²	身障者用便所	7.92	m ²
第一展示室	437.76	m ²	コントロール室	20.16	m ²
〃 二 〃	400.32	m ²	フィルター室	28.92	m ²
〃 三 〃	469.08	m ²	工 作 室	31.00	m ²
〃 四 〃	403.20	m ²	発 電 機 室	25.00	m ²
〃 五 〃	824.19	m ²	電 気 室	123.20	m ²
〃 六 〃	330.58	m ²	ボ ン プ 室	76.80	m ²
〃 七 〃	566.56	m ²	機 械 室	305.20	m ²
食 堂	119.52	m ²	高架水槽室	11.46	m ²
厨 房	36.00	m ²	E、V機械室	27.28	m ²
従業員控室等	17.28	m ²	E、V廻り	54.56	m ²
食堂ホール	61.20	m ²	ダクトスペース	35.68	m ²
ロ ビ ー	335.52	m ²	廊 下 等	123.48	m ²
第一休憩室	23.04	m ²			
〃 二 〃	23.04	m ²	合 計	5,194.59	m ²

管 理 棟

(1階)

第2会議室	22.62	m ²	庶務課室	112.34	m ²
更衣室	14.83	m ²	会 議 室	43.84	m ²
医 務 室	21.18	m ²	学芸課室	195.32	m ²
文 書 庫	22.02	m ²	学芸相談室	23.91	m ²
警 備 員 室	43.59	m ²	研究工作室	216.49	m ²
第一会議室	20.15	m ²	写真スタジオ	54.30	m ²
倉 庫	7.19	m ²	器 材 室	6.74	m ²
湯 沸 室	5.19	m ²	暗 室	12.19	m ²
便 所	24.54	m ²	第一収蔵庫	184.40	m ²
宿 直 室	34.20	m ²	〃 二 〃	42.81	m ²
物 置	9.92	m ²	E、V前室	16.39	m ²
用 務 員 室	31.83	m ²	便 所	21.50	m ²
審査室・資料準備室・荷解室	520.68	m ²	湯 沸 室 A	3.24	m ²
消 毒 室	31.79	m ²	〃 B	6.87	m ²
資 料 倉 庫	124.25	m ²	廊 下 等	60.94	m ²
荷解梱包保管室	52.67	m ²	ダクトスペースその他	3.56	m ²
荷扱入控室	21.94	m ²			
機 械 室	51.74	m ²	小 計	1,087.19	m ²
廊 下 等	123.52	m ²	合 計	2,274.60	m ²
小 計	1,183.85	m ²			

(2階)

館 長 室	33.27	m ²
副 館 長 室	23.42	m ²
第一応接室	14.67	m ²
第二応接室	14.55	m ²

浅井 忠像建立事業

1. 建立の趣旨

太平洋戦争後、文化国家として再出発した日本のあゆみの中で、千葉県美術会是有志をもっていち早く結集し、千葉県の美術文化の振興普及をめざし、主たる事業として連年千葉県美術展覧会（県展）を開催して、千葉県民参加の創造的な文化活動の一翼を担ってまいりました。53年秋には30回目の県展開催を迎えることになりました。

わたくしたちは、こうした画期的な年を記念するため、千葉県美術会の提唱を受け、広く社会的に協賛をお願いして、千葉県の芸術文化のシンボルとして、浅井忠（1856～1907）のブロンズ像の建立を計画いたしました。

浅井 忠 は千葉県の佐倉藩出身で、日本の近代洋画界の先駆的な本道を歩んだ巨匠であり、かつ、芸術的に幅広い活動を展開した軌跡は不滅の存在であります。

県民の美の広場として「みる・かたる・つくる」をめざす千葉県立美術館構内に、この 浅井 忠 像が具現すれば、偉大な業績を顕彰することになり、さらに県民文化の再発見を促すことも期待され、影響と感化は多大と信じております。

芸術文化の振興普及を願うわたくしたちは、自主的な努力はいたしますが、ここにこの事業への共鳴と建立資金のご援助を重ねてお願い申しあげる次第であります。



2. 建立に至るまでの経過

- 52. 6. 20 県美術会で県展30周年記念行事計画小委員会の設置が決まる。
- 53. 2. 14 浅井 忠 像の建立の具体的方針について、建立委員会世話人会が構成される。
- 53. 5. 17 浅井 忠 像建立委員会結成され、会長に茂木啓三郎氏推される。
- 53. 6. 6 各関係機関に趣意書と募金申込みをお願いする。
大須賀力氏に浅井 忠 像制作を依頼する。
- 53. 11. 18 浅井 忠 像除幕式が挙行される。

3. 実施概要

- 1. 題 字 浅井 忠 像 千葉県美術会長 浅見 喜舟 書
- 2. 撰 文 浅井 忠 像建立由来

日本近代洋画の先駆の巨匠で、千葉県佐倉市で成人した 浅井 忠 像が完成した。県展30回を記念して千葉県美術会が提唱し、その輪が拡大され県民的な 浅井 忠 像建立委員会に結集した所産である。

浅井 忠 は安政3年(1856)6月21日に誕生し、明治時代初期に洋画家を志した。春畝や収穫などの作品で認められ、東京美術学校教授に就任後、フランスに留学し、グレーの洗濯場等を連作し高く評価された。帰国後は京都高等工芸学校教授に転じたが、この間、数多くの後進の教育にも尽くし敬仰され、明治40年(1907)12月16日に死去した。

ここに 浅井 忠 像が建立された意義は多大である。とくに本県芸術文化の象徴として永く指標となり光彩を放つものと確信する。

昭和53年11月18日

千葉県知事 川 上 紀 一 撰文
千葉県美術会長 浅 見 喜 舟 敬書

3. 制 作 千葉県美術会常任理事・日展評議員 大 須 賀 力 (立像 高さ2.40メートル)
4. 施 工 鑄造 岡宮美術鑄造株式会社
台座石 山谷石材店(材質 万成龍王石)
植栽等環境造成 共楽園緑化
環境整備指導 千葉大学園芸学部環境植栽研究室 安 蒜 俊 比 古

4. 浅井 忠 略年譜

- 1856年(安政3) 江戸本挽町の佐倉藩邸に生まれる。幼名は忠之丞
- 1863年(文久3) 佐倉の将門に移住する
- 1875年(明治8) 上京後、国沢新九郎の彰枝堂にて洋画を学ぶ
- 1876年(明治9) 工部美術学校画学科に入学する
- 1889年(明治22) 明治美術会を同志と創立し「春畝」を出品する
- 1893年(明治26) 佐倉藩士 立見 直の妹安子と結婚する
- 1894年(明治27) 日清戦争に従軍し、後にスケッチが「従征画稿」となる
- 1898年(明治31) 東京美術学校教授に任命される
- 1899年(明治33) 西洋画研究のためフランス留学を命ぜられる
- 1902年(明治35) フランスより帰国京都高等工芸学校教授となる
- 1906年(明治39) 関西美術院々長となり「武士の山狩」完成する
- 1907年(明治40) 心臓麻痺のため逝去(享年51才)

5. 附 帯 事 業

(1) 銅像周辺の植栽

イヌツゲの生垣を約100m、東側道路に面した土手に配し、なお、前庭ならびに中庭に潮風に強いヤマモモ、モチノキ、低木のヒメクチナシ等で緑で包む環境を構成した。

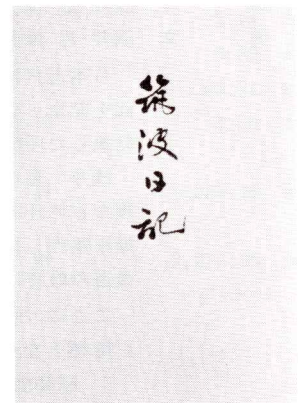
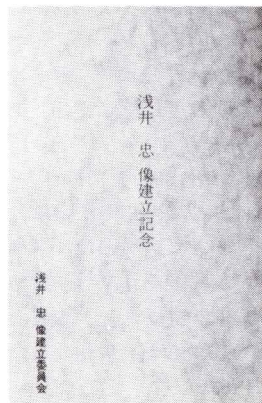
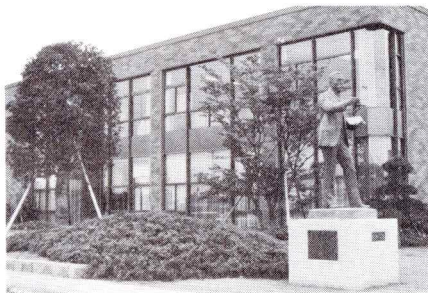
(2) 記念絵はがき刊行

浅井 忠 像の建立を、多くの関係者に実感的に報告するため、銅像を中心にした全景と銅像及び撰文、浅井の作品で、本館所蔵の「婦人像」、「京都高等工芸学校の庭」の6枚1組を印刷し配布する。

(3) 筑波日記の復刻

浅井が23才の青年図画教師の折に、佐倉を経て、多古・八日市場・銚子を通して、筑波山に登頂した10日間の紀行文を読み下しと解説を加え刊行した。

B 5 版 66ページ 1,000部



事業報告

1 展覧会の開催について

特別展として、年度当初に「黒田清輝展」を東京国立文化財研究所と共催で行ない、9月には「夭折の画家たち」を展観し、若くして世を去った、日本画・洋画家25名に焦点づけを行った。文化庁と共催した「第12回現代美術選抜展」では、日本画・洋画・版画・彫刻の代表作品が展示された。

企画展の「房総の書芸展」は、千葉県ゆかりの作家の作品に触れる機会をもった。「堀江正章とその周辺」では、旧制千葉中学校の図画教師であった堀江とその師弟関係の作品を展示した。隔年毎に千葉県とかかわりのある作家とその代表作を「第2回千葉県秀作美術展」として、各分野の作品を展覧した。

常設展では、本館所蔵の作品を二期に分け、「浅井忠とその周辺」と、風景画を中心に展示した。千葉県移動美術館では、松戸市文化ホールと、県立総南博物館で開催し、地域の人々に、美術品に接する機会と、本館の存在を示すことができた。

2 普及事業について

美術普及室では、浅井忠関係の資料室、図書、集会所を配し、広く利用に供した。また夏季大学・美術講演会・美術を語る会・実技講座等も、多くの愛好者に利用を得た。館報・年報・第2号の紀要・新たに児童向けの館案内のリーフレット、年間ポスター、更に県下全域に広報される「県民だより」等により広く事業の案内を広報した。

3 資料収集について

美術資料は、収蔵方針に基いて、本年度は特に彫塑・工芸・版画に重点をおき収集を進め、より調和ある収集をはかった。作品の寄付も、東山魁夷氏の「秋深」をはじめ、多くの作家や篤志家の好意を受けている。新規に収蔵品目録の発行と研究員による県内資料の調査を行い、収蔵資料と展示作品には、相当額の保険を掛けて、不測の事態に対応している。

4 調査研究について

日常の調査研究を展覧会へと発展させる一方、第2号の紀要を刊行し、館の姿勢を示した。

特別展は、資料室を設け、作家と作品の制作過程や歴史的な側面を明らかにした。

友の会も会員数が1,200人を突破し、有志による海外(韓国)へ美術と文化財を訪ねたり、県内外への美術館にて鑑賞をする機会をもつなど、更に洋画実技講座を自主的に計画するなどがみられた。

常 設 展

常設 収蔵作品展

- 浅井忠とその周辺
- 3人の版画家 瑛九・浜口陽三・池田満寿夫の世界

会 期 昭和53年4月6日～9月17日

展示点数 108点

入場者数 31,742人

本年度の常設展は、対象とする作家あるいは分野をしばり、特に作家の個性や業績を掘りさげること主眼を置いた展示を図った。

第1期は、浅井忠をとり上げた。黒田清輝と共に、日本近代洋画の先駆者として位置する浅井忠は、本県の生んだ作家であり、開館以来、その作品をはじめ関係資料の収集を積極的行なった。

昭和51年度に特別展「浅井忠とその師弟展」を開催し、その業績を辿ったが、今回、収蔵している作品と資料により、多面的に浅井忠の特質を探ろうとするものであった。

また同時に、版画の世界にも視点を拡大し、日本の現代美術に大きな影響を与えた瑛九、現在、フランスに留まり国際舞台で活躍している房総ゆかりの浜口陽三、そしてアメリカで多彩な芸術活動を続ける若手作家の池田満寿夫、これら個性的な3人の作家の作品を展示し、それぞれの美に触れていただく機会とした。

出 品 目 録

●浅井忠とその周辺

作 家 名	作 品 名	作 家	作 家 名	作 品 名
〈日本画〉		浅 井 忠	鍛 冶 橋	沼 景 里 倉 寺 良 楼 浜 浜 村 図 図 川 像 秋 春 女 果 後 犬
浅 井 忠	人 足 図		印 風 曳 舟 通	
	嫁 入 図		鎌 倉 建 長	
	虎 信 図		奈 平 城 大 仏 鐘	
〈洋 画〉			房 州 白 浜	
浅 井 忠	母 の 肖 像		房 州 白 浜	
	老 母 像		房 州 白 浜	
	婦 人 像		浪 太 村	
	農 婦 像		盤 梯 山 の 図	
	フ ラ ン ス 風 景 図	フォンタネージ	神 女 之 図	
	沢 入 駅 流 図	松 岡 寿	森 と 小 川 像	
	盤 梯 山 の 図	都 鳥 英 喜	婦 人 像	
	金 州 城 南 門 外 上 亭 士 像		八 瀬 の 秋	
	金 州 城 壁 上 亭 士 像		洛 北 の 早 春	
	平 城 大 同 江 煉 光 亭 士 像	霜 鳥 之 彦	ロ シ ア の 女	
	兵 性 裸 像		緑 の ス ウ ェ ー タ ー の 女	
	男 性 裸 像		秋 浴 女 と 小 犬	
	農 家 庭 園 図	黒 田 重 太 郎		
	京 都 高 等 工 芸 学 校 の 庭 園 図			
	中 沢 岩 太 像			
	仁 王 像			

作家名	作品名
石井 柏 亭	信 州 風 景
澤部 清 五 郎	ハドソン河の朝靄
間部 時 雄	田 園 風 景
〈その他〉	
浅井 忠	図 案 画 稿

作家名	作品名
浅井 忠	教科書原画
	彫 塑
	工 芸
	書 籍
	スケッチブック

● 3人の版画家 瑛九・浜口陽三・池田満寿夫の世界

作家名	作品名
瑛 九	楽 園 家
	愛 の 鳥 道
	休 日
	踊 り
	夢 の 目
	指
	ヴァイオリン
	手
	さ さ や き
	林 の 目
	少 女
	動物の仲間
	庭 園
	仲 間
	み づ く
	家 族
	波 の た わ む れ
池田満寿夫	シンデレラの広告
	Something 1
	ハートの位置
	午 後
	アウグストスに寄せて
	く ず れ た 土
	蒼 白 な る 真 珠 色
	枯 れ た す げ
	メラグラナ

作家名	作品名
池田満寿夫	春 雷
	抛 物
	胚種(または木の芽時)
	花をつけた灯心草
	開いたブラウス
	中 間
	ウエルカム B
	マーガレットの庭
	遙かなる通り
	う さ ぎ
	したびらめ
	パリの屋根
	緑のぶどう
	魚とさくらんぼ
	う い き ょ う
	びんとくるみ
	ピーマンのある静物
	トリコット
	赤い鉢と黒いサクランボ
	1/4 の レ モ ン
	サクランボと青い鉢
	テーブル掛けとサクランボ
	く る み
	26 の サ ク ラ ン ボ
	びんとサクランボ
	赤 い 鉢
	赤 い パ イ プ
	ブラジルの太陽
	て ん と う 虫

印刷物 目録 B 5 2折 6,000枚

常設 収蔵作品展 — 風景の美 —

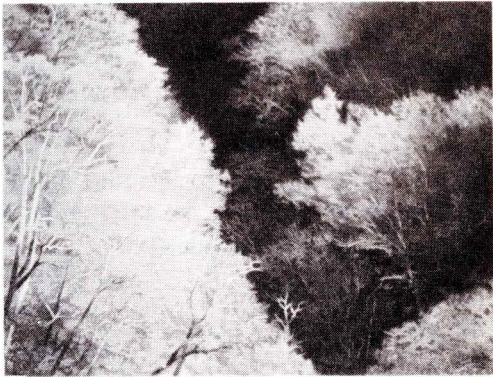
会 期 昭和54年 1月19日～ 4月15日
展示点数 42点
入場者数 26,305人

本展覧会は、千葉県立美術館が収蔵している作品から、明治以降の画家の描いた風景画に焦点をあて展覧した。
各画家は、それぞれの美意識を風景に託し独自の画面を構成し、風景は、画家にとって常に身近な存在であり、
恰好のモチーフとして大きな役割りを果してきた。日本画と洋画の織りなす風景の美を十分にご鑑賞いただき、
同一の主題から各自の色彩と技法を理解されて、その創造的な美の世界を享受され、さらに地域の美術文化活動
に資する機会とした。

出 品 目 録

作 家 名	作 品 名	作 家 名	作 品 名
＜日本画＞		椿 貞 雄	岩
岩 崎 巴 人	波 濤 岩 礁 図	鋸山から見た房総半島	
東 山 魁 夷	門	冬 の 犬 吠 崎 城	
	秋	廃	
吉 岡 堅 二	濤	岩	
酒 井 重 人	太	銚子大新楼上にて	
秋 葉 長 生	西 の 京	飯 坂 の 雪	
篠 崎 之 男	瀧	東 北 風 景	
杉 原 元 人	海	花	
田 岡 春 径	幽	ハイデルベルグ風景	
峯 岸 魏 山 人	九 十 九 谷	秋 麗 芦 ノ 湖	
＜洋 画＞		冬 の 並 木 道	
浅 井 忠	沢 入 駅		
	奈 良 郊 外		
	京都高等工芸学校の庭		
松 岡 寿	森 と 小 川		
都 鳥 英 喜	巴里郊外サンクル		
	八 瀬 の 秋		
	洛 北 の 早 春		
石 川 寅 治	犬 若 の 浜 辺		
石 井 柏 亭	信 州 風 景		
澤 部 清 五 郎	ハドソン河の朝靄		
間 部 時 雄	田 園 風 景		
原 勝 郎	モ ン マ ル ト ル		
	街 灯 の ある 風 景		
	京 橋		
	森 (A)		
石 橋 武 治	筑 波 遠 望		
	早 春		
	夜 の 富 士		
大久保作次郎	丘 上 の 鐘 楼		
林 俊 衛	岩 和 田 海 岸		
菅 谷 元 三 郎	沼 風 景		

印刷物 目録 B 5 2 折 6000枚



秋深 東山魁夷

特 別 展

—近代日本洋画の巨匠—

黒 田 清 輝 展

会 期 昭和53年4月27日～5月28日

展示点数 94点

入場者数 15,816人

黒田清輝は、慶応2年(1886)鹿児島に生まれ、東京で育ち、明治17年から26年(1884-93)までフランスに留学、はじめ法律を志し、途中から絵画に転じ、ラファエル・コランについて学び、帰国とともに西洋の新しい画風をわが国にもたらし。それは、印象派風の明るい画風で、暗い色調と旧い写実主義に低迷していた当時の画壇に大きな衝撃をあたえた。白馬会という美術団体を組織して活躍、東京美術学校西洋画科の初代教授にえらばれている。その後も、文展審査員、帝国美術院会員となり、芳醇な作品を発表し、洋画界の第一人者の地位にあり、また貴族院議員となり文化行政にもあたったが、大正13年(1924)東京で没した。

今回の展覧会は、東京国立文化財研究所との共催で行い、最初期の木炭デッサンから、大作「昔語り」制作のためのデッサンや油彩画稿類など本格的な制作の道程を示す作品群と名作を共に展示することによってこの巨匠の足跡をたどった。



特別展 近代日本洋画の巨匠
黒田清輝展

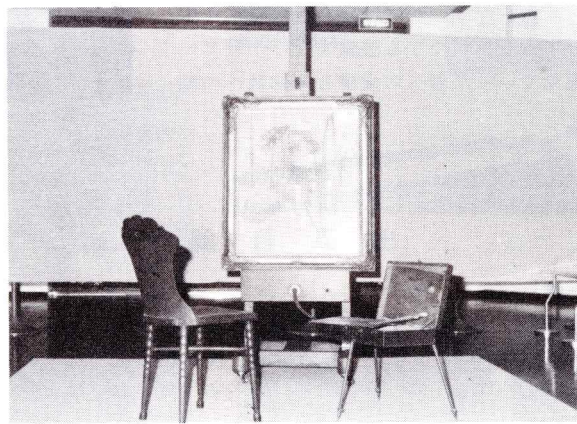
昭和53年4月27日～5月28日
東京都美術館

出 品 目 録

作 品 名	制 作 年	作 品 名	制 作 年
＜油 彩＞		昔 語 り 下 絵 (清閑寺景, 清閑寺門)	1896年
田 舎 家	1888年	犬	1899年
裸 体 女 (後半身)	1889年	母 子	1897年
裸 体 女 (全身)	1889年	湖 畔	1897年
裸 体 男 (半身)	1889年	桂 公 肖 像 (画稿)	1910年
祈 禱	1889年	婦 人 肖 像	1911～12年
自 画 像 (トルコ帽)	1889年	も る る 日 影	1914年
画 室 の 一 隅	1889年	自 画 像	1914年
パ リ ー 風 景	1890年	花 野	1907～15年
枯 れ 野 原 (グレー)	1890年頃	栗 拾 い	1918年
編 物	1891年	温 室 画 壇	1919年
七 面 鳥	1891～2年	案 山 子	1920年
赤 髪 の 少 女	1892年	嵐	1919年
ブ レ ハ の 海 岸	1892年	つ っ ち	1921年
風 景 (グレー)	1892年頃	雪	1922年
残 雪	1892年頃	薔 薇	1923年
昼 寝	1894年	挹 芳 園	1923年
昔 語 り 下 絵 (構図)	1896年	梅 林	1924年
昔 語 り 下 絵 (草刈り娘, 僧, 舞妓, 仲居, 男と舞妓)	1896年		1924年
昔 語 り 下 絵 (舞妓)	1896年		
昔 語 り 下 絵 (仲居)	1896年		

作 品 名	制 作 年
〈木炭デッサン〉	
女 の 顔 (模写)	1886年
裸 婦 習 作	1887年
裸 体 習 作	1887年
裸 体 習 作	1887年
裸 体 習 作	1887年
女 の 顔	1887年
裸 体 習 作	1887年
裸 婦 習 作	1888年
裸 体 習 作	1888年
裸 婦 習 作	1888年
男 の 顔	1888年
少 年	1888年
裸 婦 習 作	1888年
裸 体 習 作	1888年
裸 体 習 作	1889年
女 の 顔	1889年
椅子 による 女	1889年
裸 婦 習 作	1890年
裸 体 習 作	1890年
繡 物 す る 女	1890年頃
編 物 す る 女	1890年頃
雪 景	1890年頃
夏 図 画 稿 (傘持つ女)	1892年
夏 図 画 稿 (傘持つ女)	1892年
夏 図 画 稿 (女の顔)	1892年
夏 図 画 稿 (手)	1892年
夏 図 画 稿 (女の顔)	1892年
夏 図 画 稿 (女の顔)	1892年
夏 図 画 稿 (手)	1892年
夏 図 画 稿 (坐る女)	1892年
夏 図 画 稿 (坐る女)	1892年
夏 図 画 稿 (横たわる女)	1892年
夏 図 画 稿 (坐る女)	1892年
昔 語 り 図 画 稿 (構図)	1896年
昔 語 り 図 画 稿 (舞妓半身像)	1896年
昔 語 り 図 画 稿 (男着衣半身像)	1896年
昔 語 り 図 画 稿 (男の脚)	1896年
昔 語 り 図 画 稿 (手)	1896年
昔 語 り 図 画 稿 (男裸体半身像)	1896年
昔 語 り 図 画 稿 (仲居全身像)	1896年
昔 語 り 図 画 稿 (仲居半身像)	1896年
昔 語 り 図 画 稿 (舞妓全身像)	1896年
昔 語 り 図 画 稿 (舞妓半身像)	1896年
昔 語 り 図 画 稿 (僧半身像)	1896年
昔 語 り 図 画 稿 (僧の手)	1896年
昔 語 り 図 画 稿 (草刈り娘全身像)	1896年
昔 語 り 図 画 稿 (草刈り娘の足)	1896年

作 品 名	制 作 年
昔 語 り 図 画 稿 (僧の足)	1896年
婦 人 肖 像	1898年
花 野 図 画 稿	1907年頃
〈写生帖〉	
写 生 帖 2 号 (Fontainebleau)	1887年
写 生 帖 3 号 (ベルギー旅行 Blankenberge)	1887年
写 生 帖 4 号 (Gréz, 解剖学講義)	1888年
写 生 帖 5 号 (Barbizon, Boigneville)	1888～89年
写 生 帖 6 号 (Blankenberge)	1889年
写 生 帖 7 号 (Gréz)	1890年
写 生 帖 8 号 (アルザス旅行 Gerardmer, Epinal)	1891年
写 生 帖 9 号 (Brehat)	1891年
写 生 帖 25 号 (Gréz, 夏図構図)	1892年
写 生 帖 10 号 (京都旅行)	1893年
写 生 帖 11 号 (京都旅行)	1893年
写 生 帖 12 号 (京都旅行)	1893年
写 生 帖 26 号 (北海道旅行)	1894年
写 生 帖 13 号 (横浜本牧, 鎌倉)	1894年
写 生 帖 14 号 (日清戦争)	1894年
写 生 帖 15 号 (日清戦争)	1894年
写 生 帖 16 号 (日清戦争ー野戦病院)	1894～5年
〈書 簡〉	
黒 田 清 綱 宛	1884. 10. 3
黒 田 清 綱 宛	1886. 2. 10
黒 田 清 綱 宛	1887. 4. 8
〈日 記〉	
1891年6月12日～25日 (明治24年, 独仏国境旅行記)	
1895年1月18日～30日 (明治28年, 日清戦争従軍日記)	
1896年1月～12月 (明治29年)	
1899年住所録 (明治32年, 表紙・自画像)	
1917年1月～12月 (大正6年)	
〈参考出品〉	
朝妝図 (焼失) 写真パネル	1893年
昔語り (完成図・焼失) 写真パネル	1898年
高村光太郎作 黒田清輝像 ブロンズ	1932年
遺品 画室用イーゼルと椅子	
遺品 絵具箱	
記録写真	16枚



遺品 画室用イーゼルと椅子



講演会 5月6日「黒田清輝と明治絵画」 陰里鉄郎氏

美術を語る会 5月20日「フランス留学時代の黒田清輝」 大木 衛

印刷物 図録 24.0cm×25.0cm 1,000部 ポスター 73.0cm×51.5cm 2500枚 36.5cm×51.5cm 2500枚
チラシ B5 29000枚

夭折の画家たち

会 期 昭和53年 9月21日～10月19日

展示点数 50点

入場者数 7,939人

わが国における近代絵画の展開は、かつてない激しい動きと広がりをもったものであった。そして、これらの絵画運動は、それぞれの時代の変化を鋭敏に反映し、感受性豊かな若き作家達によって推進されてきたともいえる。それは、従来の絵画への懐疑でもあり、反抗でもあり、また次代を担わんとする自負の芽ばえでもあった。しかし、新しい芸術の創造を目指し、熱情をかたむけながらも、病魔におかされ、或いは突然の事故に見舞われるなど、苦悶のうちにその短い生涯を閉じた作家達もまた少なくない。これら夭折の画家達の鋭い感性によってとらえられた問いかけは、自己の時代を生きた証しとして、今日においてもなお新たな感動をなげかけている。それはまた、若くして死んでいった者への愛惜と未知数への期待でもある。



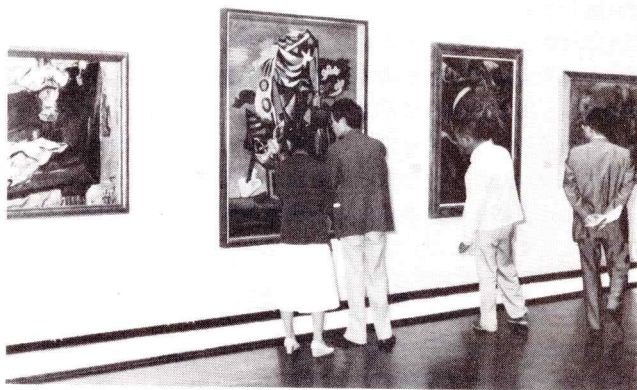
出 品 目 録

作 家 名	作 品 名	作 家 名	作 品 名
＜日本画＞			
西 郷 孤 月	月 ・ 柳 ・ 桜 台 湾 風 景	岸 田 劉 生	二 人 麗 子 飾 髪 図
菱 田 春 草	秋 郊 帰 牧 紅 葉 朝	関 根 正 二	姉 弟 葬 火 女
今 村 紫 紅	東海道五十三次絵巻の内 第1巻(品川)	古 賀 春 江	煙 庭 園 の 少 女
池 田 輝 方	お 七 今昔芝居風俗のうち 幕間	村 山 槐 多	湖 水 と 女 婦
池 田 蕉 園	秋 の 思 い 出 ね ざ め の 恋	前 田 寛 治	赤 い 帽 子 の 少 女
小 茂 田 青 樹	丘 に 沿 え る 道 鳴 雞 図	佐 伯 祐 三	裸 パ リ の 街 角 室
速 水 御 舟	手 洛 北 修 学 院 村 溪 泉 二 図	佐 分 真 鼎	画 パ レ ッ ト を 持 つ 女
落 合 朗 風	肥 梅 ケ 畑 の 麦 秋	板 倉 鼎	金 魚 と 花 女
＜洋 画＞		三 岸 好 太 郎	黒 椅 子 に よ る 女
青 木 繁	日 本 武 尊 景	三 岸 好 太 郎	マ リ オ ネ ッ ト ラ
中 村 彝	筑 後 風 景 林 檎 と 瓶 の ある 静 物 景 像	鬘 光	静 肖 像 物
岸 田 劉 生	大 島 風 景 数 藤 博 士 像	小 野 幸 吉	ラ ン プ の ある 静 物
	麗 子 座 像	飯 田 操 朗	祭 ニ ワ ト リ 争 路
		野 田 英 夫 介	帰 駅 近 く
		松 本 竣 介	N 街 (自 転 車)

作家名	作品名
松本 竣介	運河 (汐留近く)
石井 茂雄	戒厳状態

作家名	作品名
石井 茂雄	戒厳状態

2



日本武尊 青木 繁



林檎と瓶のある静物 中村 繁

講演会 10月8日「近代日本美術の青春」 本間 正義氏

美術を語る会 9月30日「夭折の画家たち」 高橋 在久

映画会 9月23日・10月14日「近代日本絵画の流れ」

印刷物 図録 26.0cm×18.2cm 1000部 ポスター 73.0cm×51.5cm 2000枚
チラシ B5 10000枚(兼・目録)

第12回現代美術選抜展

会 期 昭和54年 1 月 9 日～1 月21日

展示点数 74点

入場者数 1,940人

この展覧会は、文化庁が東京で毎年開催される美術公募団体展の受賞作品を一堂に集め、さらに過去文化庁が買上げた作品をも加えて企画したもので、東日本では本館のみ公開した。

ここに選ばれた作品をとおして、現代社会の複雑な要素の中で、真摯な現実認識と美術創造の仕事に取り組み、さらにその可能性をも先取りしようと図っていることが読みとれる。おだやかな自然観照、直截な造型空間の追求、心象風景や幻想世界の展開、社会的状況のアイロニーなど、作家それぞれに現代へのアプローチが試みられている。このように多様化する現代美術の動向を理解していただく一助として開催した。

第12回 現代美術選抜展

会期 昭和54年 1 月 9 日～1 月21日



会期 昭和54年 1 月 9 日～1 月21日

会場 千葉県立美術館

〒260 千葉市中央区本町1-1-1

出 品 目 録

作 家 名	作 品 名	作 家 名	作 品 名
＜日本画＞			
市 川 保 通	樹 花	西 山 博	魚 人 II
伊 藤 正 男	二 人 の 風 景 (I)	畑 遼	流 失
平 岩 洋 彦	風	小 野 和 子	作 品 '77-1
松 本 俊 喬	息 幸	古 川 清 右 衛 門	緑 色 の 中 の 形
今 井 守 彦		神 谷 幸 子	籠 る
大 豊 世 紀	実 の な る 樹 の 下 で	横 地 洋 司	ノ ブ と 仲 間 た ち
佐 藤 圀 夫	山 里	福 田 篤	対 話
鹿 島 喜 陌	街 に	藤 島 清 平	眼鏡をはずして書類を見る男
那 須 勝 哉	裸 婦 立 像	金 森 良 泰	Time Impact (II)
室 井 東 志 生	女 人	奈 良 達 雄	マ ス タ ー ド I
米 谷 清 和	刻 々	西 崎 泰 豪	凱 歌 終 章
岩 壁 富 士 夫	モンテ・ゴルドの家族	井 上 覚 造	文 明 批 判 序 説
今 野 忠 一	妙 義	小 川 以 久 男	睡 蓮
関 口 正 男	補 陀 落 浄 土	藤 森 久 一	遙 か な る 装 い
高 橋 常 雄	クリシュナ神話より	小 西 保 文	日 暮 れ て
守 屋 多 々 志	駒 競 べ	佐 々 木 信 平	球 を 持 つ 女
小 泉 淳 作	山 を 切 る 道	敷 野 健 一	僕 が い た 丘
田 中 青 坪	浅 間 山	大 滝 由 季 生	ひ ら け 行 く 山 麓
三 谷 青 子	晨	桐 生 照 子	江 ノ 電
＜洋 画＞		高 橋 規 矩 治 郎	漁 港
松 下 絹 子	た そ が れ 旅 情	三 橋 文 雄	山 村
三 坂 雅 彦	風 の 音	安 増 千 枝 子	一 隅
大 谷 哲 生	いろはごよみ (藤と萩)	若 林 稔	午 後 の 客
川 上 明 子	私 み た (いち)	坂 本 京 子	薔 薇 の 暗 示 C
菊 地 牧 子	Affair 77-3	遠 瀬 博	ある空間エネルギーの凝集
寺 田 栄 次 郎	白 い 影	須 田 寿	白 い 家 (ミコノス)

作家名	作品名
日 野 耕之祐	鳥 が 舞 う 北 の 海
植 木 舜 一	記 念 写 真
鬼 束 恵 司	P - 43 の 記 憶
平 山 隆 也	山 崎 氏 の 首
粕 谷 圭 司	曲 しらべ I
佐 山 道 知	大 地 の 詩
津 田 裕 子	ユ ウ
朝 岡 康 二	作 品
山 本 兼 文	石 会
瀬 戸 剛	お ん な
丹 羽 武 雄	晩 夏
森 田 清 一	濤

作家名	作品名
安 田 周三郎	塊 (異形E)
宮 崎 稔	Position
松 尾 光 伸	OVALOGY-012
山 縣 寿 夫	安 楽 椅 子
若 林 奮	振 動 尺 試 作 II
＜版画＞	
サイトウ 良	作 品 №536-731
松 島 順 子	静 と 動
浦 地 清 爾	寓 意 の 塔
西 田 知 子	反 映 №10
黒 崎 彰	夏 の 夢 2
	禁じられた恋人たち 5

出品団体・出品展数一覧

種目	日 本 画	洋 画	版 画	彫 塑	計
選 抜 作 品	13	29	4	11	57
招 待 作 品	3	2		2	7
文 化 庁 買 上 作 品	3	2	2	3	10
計	19	33	6	16	74

団体名(五十音順)	種 目	日 本 画	洋 画	版 画	彫 刻	計
1. 一 陽 会			2		1	3
2. 行 動 美 術 協 会			2		1	3
3. 国 画 会			2	1	1	4
4. 主 体 美 術 協 会			2			2
5. 春 陽 会			2	1		3
6. 新 制 作 協 会			2		1	3
7. 自 由 美 術 協 会			2		1	3
8. 創 画 会	4					4
9. 独 立 美 術 協 会			3			3
10. 二 科 会			3		1	4
11. 二 紀 会			3		2	5
12. 日 展	7		6		4	17
13. 日 本 版 画 協 会				2		2
14. 日 本 美 術 院	5					5
15. モダンアート協会			2		1	3
小 計	16	31	4	13		64
文 化 庁 買 上 作 品	3	2	2	3		10
計	19	33	6	16		74

印刷物 図録 24.0cm×18.2cm 500部 ポスター 73.0cm×51.5cm 1500枚
目録 B5 10000枚(兼・チラシ)

企 画 展

—江戸から明治にかけての書家・学者・文人の書跡による—

房 総 の 書 芸 展

会 期 昭和53年 7 月20日～ 8 月31日

展示点数 92点

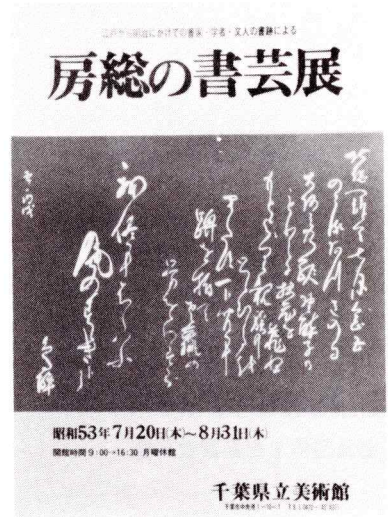
入場者数 10,647人

この展覧会は、本館企画の書の展覧会としては、開館以来はじめてのもので、今回は、江戸から明治にかけての房総の書芸に視点を当ててみた。

房総の書の歴史をたどると、墨書土器などから、わが国の書と同じように奈良時代に源流を求めることができるが、文字は長い間、皇族・貴族・高僧など上流社会の中で活用され、一般の人々には縁遠いものだった。

しかし、江戸時代以降は、幕府の文教政策などの影響により一般化し、実用から装飾、純粋な芸術面にまで、その美も多彩になり、房総の地にも、書とかかわりのある、多数の儒者、文人墨客があらわれた。

ここでは、房総の地にかかわりを持ちながら、文化の発展につくした、先駆者の作品を集め作者の遺風と墨跡にふれ、用の美と芸の美の理解、鑑賞の機会とし、書芸の振興に役立つことを目的とした。



出 品 目 録

作家名	作 品 名	装丁	作家名	作 品 名	装丁
柳田 正斉 やなぎだ しょうせい	老 境 也 怡	軸物	海上 胤平 うなかみ たねひら	高 殿 の	軸物
	明 治 三 年	軸物		ほ ろ ほ ろ と	短冊
	天 姥 山 頭	軸物		う す く こ く	短冊
	録 山 陽 の 詩	軸物		あ や ま り も	短冊
大村 焦雨 おおいむら しょうう	臥 読 荘 生	まくり		い ざ 子 ど も	短冊
	皓 月 照 青 簾	まくり	鈴木 雅之 すずき まさゆき	水 郷 春 望	短冊
香川 松石 かがわ しょうせき	緑 遍 山 原	軸物	伊藤 左千夫 いとう ささちゆう	「寺田憲」宛	書状
神山 魚貴 かみやま ぎんき	露 と い え ど	軸物		天 地 の も の	短冊
	柳 家 春 風	扇面	蔵 真 くら まこと	「成田図書館」宛	書状
	山 家 春 苔	短冊		「石川照勤」宛	書状
	う す く こ く	短冊		小 春 日 の	短冊
	か す み	短冊	鱸 松塘 すずき しょうとう	京 城 同 讌	軸物
	河 春 月	短冊		山 陽 先 生 遺 像	軸物
	忍 思 恋	短冊		題 画 絶 句	軸物
伊能 穎則 いのう ひでのり	河 志 も の	軸物		題 枇 杷 石 榴 図	軸物
	国	短冊		溪 声 猶 帶 雨	軸物
	古 渡 千 鳥	短冊		詠 蘭 詩	色紙
海上 胤平 うなかみ たねひら	玉 は あ れ ど	軸物	白井 鳥酔 しら い ちようすい	我 儘 に	額面
	さ く ら の 歌	軸物		名 月 や	軸物
	長 歌 「信濃には」	軸物		一 つ 家 の	短冊
	千 歳 川	軸物	小河原雨塘 おがわら うとう	ほ と と ぎ す	短冊
			青野 太郎 あおの たろう	う ぐ い す の	短冊

作家名
あおの たこう
青野 太 筈
くば き ちくそう
久保 木 竹 窓

うきみしんすい
宇佐美 滋水

とうじょう いちどう
東条 一堂

かいほう ぎょそん
海保 漁村

芳野の 金陵の

た なか じゅう ご けん
田 中 従 吾 軒
こ なが いし しょう しゅう う
小 永 井 小 舟
よ だ が つか い
依 田 学 海

管李孫	と	品	名
逃 てき 詩	白	画	に
門巷	(八歳)	青	詩
七夕	七	律	苦
野水	縱	八	詩
録唐	人		横
過酒			首
題			家
不多			画
天	識	前	惑
元		言	行
腹	微	之	籟
讀	中	書	云
天	十	年	籍
詩	回	地	書
芳	書	興	輒
漫	樹	有	政
霧	傾	濁	陰
閑	雨	迷	酒
万	適	詩	濛
「	古	六	首
「	楓	剛	風
万	大	彦	宛
	大	彦	宛
	翠	園	亭

裝丁
短冊
軸物
軸物
軸物
軸物
扇面
屏風
扇面
額面
軸物
軸物
額面
軸物
軸物
軸物
軸物
軸物
軸物
額面
扇面
書狀
書狀
短冊

作家名
木村 正 辞

にしむら 西村 しげき 茂樹

てしま
手島
つだ
津田
たか
高森

せい
精一
うめ
梅子
すい
砕

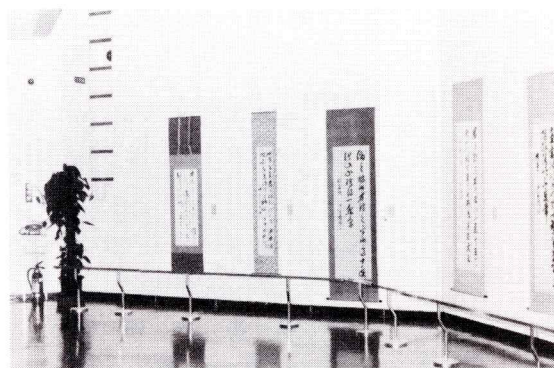
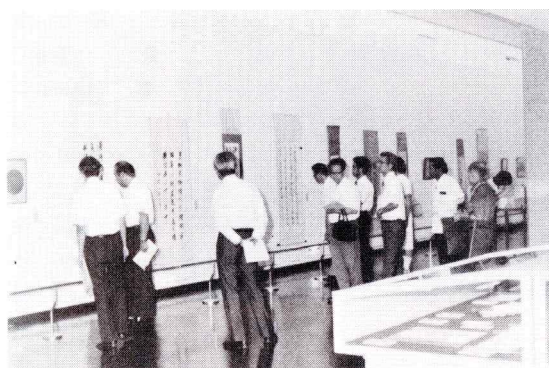
い
あ
こ
がん
ん
巖

あさ い ちゅう
浅井 忠

かとり 香取 はずま 秀真

宛宛山雨其身宛記宛蘭帖宛宛歌の歌堂宛宛て声曙鳥の
名「重野安文」出挾敬汝爵塾吉盆書「」浜公節節い鵜漁映床
作「大楓雷子平伯館俊買妻母貝軍都塚塚に陽

装丁
 書狀
 証書
 短冊
 軸物
 軸物
 軸物
 書狀
 まくり
 書狀
 軸物
 冊子
 書狀
 書狀
 軸物
 軸物
 軸物
 書狀
 書狀
 短冊
 短冊
 短冊
 短冊
 短冊



印刷物 ポスター 59.5cm×42.0cm 1000枚 目録 B5 2折 7000枚

堀江正章とその周辺

会 期 昭和53年12月7日～昭和54年1月15日

展示点数 59点

入場者数 12,364人

堀江は、日本近代洋画の黎明期に活躍し、黒田清輝がもたらした外光派よりも早く、三原色を用いて当時としては無類の明るい画風で、「コバルト先生」とも呼ばれた。

また、画学専門学校、大幸館、そして旧制千葉中学校に在職中、教え子たちの美術への才能を見出し、育み、美術史上に名を列ねる多くの美術家を輩出させた。

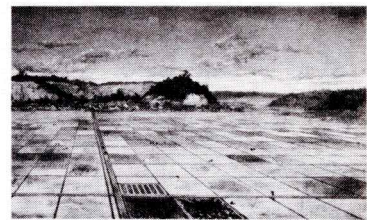
この展覧会では、近代日本洋画史上に重要な軌跡を残し、しかも美術教育においても忘れることのできない堀江正章に焦点をあて、さらに彼をとりまく師弟の作品をも同時に展覧し、画家として、教育者としての業績を探ろうと開催した。

日本美術史に残る多くの逸材を育てた
旧制千葉中学校図画教師

堀江正章とその周辺

昭和53年12月7日(祝)～昭和54年1月15日(日)

休館日 月曜日・祝日、昭和54年1月13日(土)・14日(日)
昭和53年12月26日(土)～昭和54年1月4日(日)



協賛 千葉市 千葉県立美術館 千葉県立美術館
主催 千葉県立美術館
企画 堀江正章 堀江正章 堀江正章
協力 千葉県立美術館 千葉県立美術館 千葉県立美術館
後援 千葉県立美術館 千葉県立美術館 千葉県立美術館
千葉市 千葉県立美術館 千葉県立美術館
〒260-0001 千葉市中央区本町1-1-1 千葉県立美術館
TEL 043-222-1111 FAX 043-222-1112

出 品 目 録

作 家 名	作 品 名	作 家 名	作 品 名
堀 江 正 章	室 内 草 花 図	矢 崎 千代二	エ ル ベ 河 の 雨
	富 士 山		ト リ ノ 風 景
	耕 地 整 理 の 図	岡 田 三郎助	あ や め の 衣
	西村房太郎富士登山の図		満 州 記 念
	西 村 房 太 郎 像	和 田 英 作	お う な
	西 村 房 太 郎 氏 祖 母		黄 衣 の 少 女
	少 女	中 沢 弘 光	山 の 湯
	井 上 甚 太 郎 像		舞 妓
	井 上 善 次 郎 像		静 物
	白 鳥 儀 三 郎 氏 父 像	高 木 背 水	廃 屋
	白 鳥 儀 三 郎 氏 母 堂		大 沼 風 景
	鈴 木 利 右 衛 門 像	柳 敬 助	風 景 (生家)
	内 田 実 像		雨 の 夕 暮 (雑司谷)
	高 橋 善 四 郎 像		乗 鞍
	鶴 岡 常 太 郎 像	麻 生 茂	レキザンブルグ公園の朝
	飯 田 正 宣 像	石 井 林 響	白 鵲
	飯 田 き み 像		浦 島 太 郎 図
	花 と 少 女	大 野 隆 徳	蘇 州 留 園 の 秋
	石 膏 像 脚 部		裸 婦 州
サン・ジョバンニ	山 尾 忠 次 郎 像		蘇 州 州
曾 山 幸 彦	武 者 試 鵠	菅 谷 元三郎	沼 風 景
	日 光 陽 明 門		農 婦 二 人
	杵 を 持 つ 男	板 倉 鼎	裸 婦
松 室 重 剛	風 景 (熱海)		黒 衣 の 女
	つ ば き		静 物
	風 景 (岳)	和 田 清	立 像

作家名	作品名	作家名	作品名
浅井 真	秋の白樺林	山谷 鏐一	白
中村 壮麿	春のながめ	青木 滋芳	厳
国松 伽耶	風	遠藤 健郎	朝
	港		市 (輪島)

資料コーナー

- 工部美術学校修業証（松室重剛）
- 工部美術学校関係者写真1
- 工部美術学校関係者写真2
- 『工部省 美術』（国立公文書館所蔵）
- 『校友会雑誌』第62号・大正12年3月5日発行（堀江正章「明治時代の西洋画」所収）
- 堀江正章「明治時代の西洋画」の原稿コピー（東京国立文化財研究所所蔵）
- 『千葉中学校 生徒画帳』2冊、明治45年（1912）
- 帽章図案（堀江正章図案化）
- 修身教授用掛絵（著作兼発行人・松本貢／画作者・堀江正章／印刷兼発行人・飯田正宣）
- 水彩画『松と竹』号：筑摩
- 『小学校農業教科書』下巻（堀江正章「耕地整理図」記載）
- 『堀江正章先生伝』昭和31年7月、堀江正章先生顕彰会発行
- 解説パネル 3枚（「耕地整理図」「室内草花図」「富士山」について）
- 堀江正章略年譜 1枚



美術を語る会 1月13日「堀江正章を語る」 松戸節三氏・遠藤健郎氏

印刷物 図録 25.7cm×18.2cm 200部

ポスター 59.5cm×42.0cm 1000枚 チラシ B5 10000枚 目録 B5 4000枚

第 2 回千葉県秀作美術展

会 期 昭和54年 2 月 8 日～ 3 月 4 日
展示点数 89点
入場者数 7,458人

現在活躍中の本県に関係のある作家の作品を過去 2 年間の発表の中から選考し、一堂に展観した。美術評論家、美術記者、作家等からなる選考委員会で99点の作品が最終的に選ばれたが、作家との交渉の結果、出品数は、日本画16点、洋画24点、彫塑18点、工芸12点、書14点、版画5点の計89点となった。今回の特徴は、全体の数を前回よりしぼったことだが、その中にあって、新しい作家が14名含まれていることは大変意義深いことと思う。

今日、各地いたるところで種々の展覧会が開かれ、いろいろな芸術表現が生み出されている。このように多様化する現代美術の流れの中で、本秀作美術展の作品鑑賞を通して本県関係作家の活動を理解し、併せて今後の動向を見つめる機会とした。

2月8日(木)～3月4日(日) 月曜休館

第 2 回

千葉県秀作美術展

千葉県立美術館

千葉市中央港 1-10-1 TEL 0472-42-8311

出 品 目 録

作 家 名	作 品 名	作 家 名	作 品 名
〈日本画〉			
石 川 豊	燦々	高橋規矩治郎	漁
小 野 具 定	ある日の漁港	高松健太郎	作品「雲の人」
加倉井和夫	塔	時 田 幸 彦	ピサの斜塔
黒 沢 吉 蔵	我が郷	羽 生 智 樹	闘志を秘める鳥達
後 藤 純 男	新雪	原 三 郎	魔船
篠 崎 之 男	蟹気	峯 岸 義 一	白のロマン
島 多 訥 郎	庭の秋	村 山 密	LE PORT (港)
高 橋 澄 爽	峭崖	森 本 草 介	往
高 畑 郁 子	メスティーソの女達	山 谷 鎧 一	暖をとる海女
立 石 春 美	井上 傳 女	山本不二夫	海の見える丘
立 石 秀 春	華 嚴 化	渡 辺 晋	回転木馬
戸 田 康 一	風 化	輪 違 宣 和	行進する楽士達
林 功	耐え	〈彫 塑〉	
東 山 魁 夷	凍池	伊 藤 礼 太 郎	墜影
松 尾 敏 男	荒野	大 国 丈 夫	
渡 辺 学	夜明け	大 須 賀 力	朝粧
〈洋 画〉		木 村 賢 太 郎	うごめくトルソーⅡ
秋 元 松 子	静物	郡 司 和 男	詩人の肖像
浅 井 昭	分化	島 田 勝 吾	誕生
麻 生 蓉 子	まち	島 根 紹	「息をせず生きる方法について」シリーズ
天 野 三 郎	舟を待つ	No. 19 タミーの夢Ⅱ	FEELING-LOVE
小 川 イ チ	山の月 A	鈴 木 啓 子	海
熊 谷 文 利	秘液を飲む佳人占師	鈴 木 徹	受・夏
小 林 数	沖繩の岬 (宮城島)	鈴 木 徹	存在する私
桜 田 精 一	鳩紋	鈴 木 実	風の肖像
笹 岡 了 一	旅愁	中 島 幹 夫	雪の子
塩 水 流 功	「またきてね!」	長 谷 川 昂	水の中の太陽 - 77
篠 崎 輝 夫	絵馬による	原 武 典	雌蕊
鱈 利 彦	房州風景	堀 豊 之	モニュメンタルな樹(2)
		堀 川 恭	
		山 本 正 道	秋

吉
青
香
神
佐
鈴
武
戸
土
信
藤
堀
山

浅
浅
伊

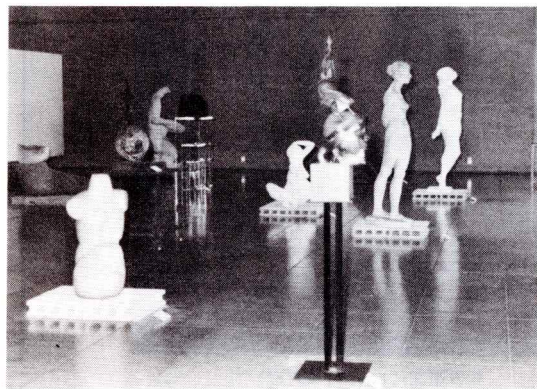
印刷物

作家名
吉野毅
〈工芸〉
青木滋芳
香取正彦
神谷紀雄
佐治賢使
鈴木治平
武田武弘
戸島甲喜
土肥満
信田洋
藤田喬平
堀口光彦
山本正年
〈書〉
浅見喜舟
浅見錦龍
伊藤京桜

作品名
夏の終り (浜風)
峽
朧銀玉錯花瓶
青瓷秋草紋鉢
晨山羊盤
雨月物語
聖域の傳説
伊羅保釉花器
スクラム (作品74)
飾宮「飛鳥の露」
日曜日の雨
「膚」連作
楽哉無一事
古泉千樗の歌
貞心尼の歌

作家名
今関脩竹
小川瓦木
金子聰松
小暮青風
鈴木方鶴
高沢南総
高橋蒼峰
種谷扇舟
千代倉桜舟
中村象閣
福田襄州
〈版画〉
牛玖健治
富田文雄
浜口陽三
深沢幸雄
星襄一

作品名
遊びる
に よる
安の大雁塔
髪命山
年寿長
風霽月
告開豊
聖一
句の一首
李白詩の一節
祥
75 - 20
さくらんぼと青い鉢
詩版集「ポーへの讃歌」より
王ジ・ア・黒猫樹



印刷物 ポスター 36.5cm×51.5cm 1500枚 目録 B 5 10,000枚 (兼チラシ)

第2回 千葉県移動美術館

松戸市文化ホール

会 期 昭和53年 7月18日～30日（12日間）

千葉県立総南博物館

会 期 昭和53年 8月1日～27日（24日間）

展示点数 36点

入場者数

松戸市文化ホール 1,247人

千葉県立総南博物館 12,215人

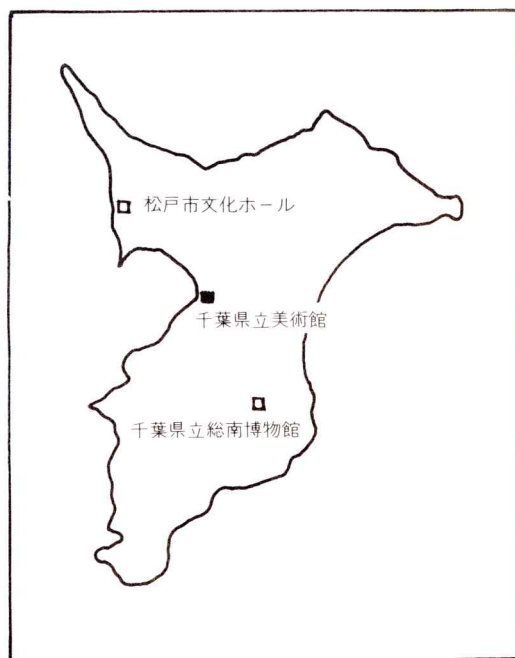
昨年、開設間もない県立美術館の存在を、より多数の県民の皆様
に知っていただくことと、本館収蔵作品の鑑賞の機会を、より広範
な地域に拡大することを目的として、本館収蔵作品による移動美術
展を開催し、幸にも、大方の好評をいただくことができた。

本年も引続き、ここに、第2回目の移動美術展を開催した。

今回は、本県出身の近代金工界の先駆となった香取秀真と津田信
夫の作品、及び、現在活躍中の信田洋の作品、更に国際的にも評価
の高い、瑛九、浜口陽三、深沢幸雄、池田満寿夫の4人の版画作品
を御鑑賞いただくことにし、郷土の美術家の作品をさらに多くの県
民に触れ合う機会を拡大して、観覧者各位の心の糧となればと企画
したものである。



松戸市文化ホール(松戸市)



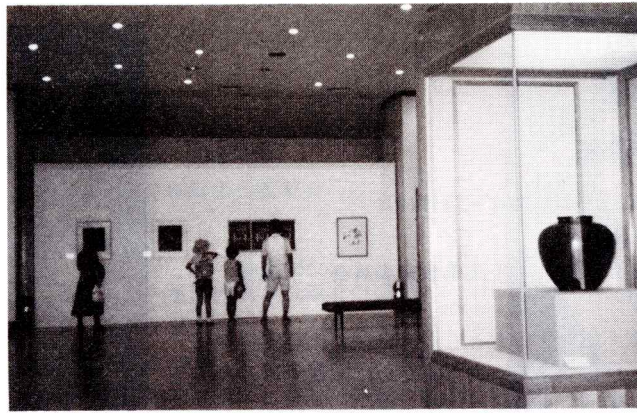
作
〈工
香 取

津 田

信 田

〈版
瑛

印刷物



千葉県立総南博物館(大多喜町)会場

出品目録

作家名	作品名	作家名	作品名
〈工芸〉		九	
香取秀真	菊 ^{きく} 文 ^{ぶん} 鳳 ^{ほう} 笑 ^{わら} 筋 ^{すぢ} 六 ^{ろく} 銚 ^{しゅう} 一 ^{いち}	瑛	顔 ^か オ
津田信夫	金 ^{がね} 文 ^{ぶん} 鳳 ^{ほう} 獅 ^し 入 ^{いり} 角 ^{かく} 銅 ^{どう} 點 ^{てん}	浜口陽三	ペラグと1匹虫ろ蝶ラ宴達Aソ影ス旅の中事
信田洋	鳳 ^{ほう} 子 ^こ 北 ^{きた} 伸 ^の 九 ^く 蠟 ^{ろう}	深沢幸雄	190と1匹の蝶の宴達Aソ影ス旅の中事
〈版画〉		池田満寿夫	顔オペラグと1匹の蝶の宴達Aソ影ス旅の中事
瑛	九		顔オペラグと1匹の蝶の宴達Aソ影ス旅の中事
	よ		顔オペラグと1匹の蝶の宴達Aソ影ス旅の中事
	ろ		顔オペラグと1匹の蝶の宴達Aソ影ス旅の中事
	こ		顔オペラグと1匹の蝶の宴達Aソ影ス旅の中事
	び		顔オペラグと1匹の蝶の宴達Aソ影ス旅の中事
	B		顔オペラグと1匹の蝶の宴達Aソ影ス旅の中事

千葉県芸術祭

第30回 千葉県美術展

会 期 昭和53年10月28日～11月19日

展示点数 1,582点

主 催 千葉県美術会・千葉県教育委員会・千葉県

本県の美術家の作品を広く紹介するとともに、県民の美意識を高め、郷土美術文化の振興と情操の純化に資するために開催するもので、日本画・洋画・彫塑・工芸・書道の各分野を展示した。

出品展数

	会員出品	公募出品	入選点数	展示点数
日本画	74 遺作3 (67)	179 (196)	151 (128)	228 (195)
洋画	167 遺作2 (162)	592 (557)	319 (304)	488 (466)
彫 塑	51 遺作3 (41)	29 (27)	25 (31)	79 (72)
工 芸	37 遺作1 (36)	116 (86)	97 (81)	135 (117)
書 道	163 遺作3 (160)	736 (681)	486 (481)	652 (641)
計	492 遺作12 (466)	1652 (1547)	1078 (1025)	1582 (1491)

() 内は29回展



第30回千葉県美術展
第1回 千葉県美術会
第2回 千葉県美術会
第3回 千葉県美術会
第4回 千葉県美術会
第5回 千葉県美術会
第6回 千葉県美術会
第7回 千葉県美術会
第8回 千葉県美術会
第9回 千葉県美術会
第10回 千葉県美術会
第11回 千葉県美術会
第12回 千葉県美術会
第13回 千葉県美術会
第14回 千葉県美術会
第15回 千葉県美術会
第16回 千葉県美術会
第17回 千葉県美術会
第18回 千葉県美術会
第19回 千葉県美術会
第20回 千葉県美術会
第21回 千葉県美術会
第22回 千葉県美術会
第23回 千葉県美術会
第24回 千葉県美術会
第25回 千葉県美術会
第26回 千葉県美術会
第27回 千葉県美術会
第28回 千葉県美術会
第29回 千葉県美術会
第30回 千葉県美術会



解説会 11月4日 日本画 五十嵐 幹氏 11月11日 洋画 山谷 鎭一氏
書 宇津木 雀声氏 彫 伊藤 孝氏
工 土肥 満氏
印刷物 目録 25.8cm×18.4cm 3000部 ポスター 36.4cm×51.2cm 1000枚

第10回 千葉県高等学校芸術祭

美術・工芸・書道展

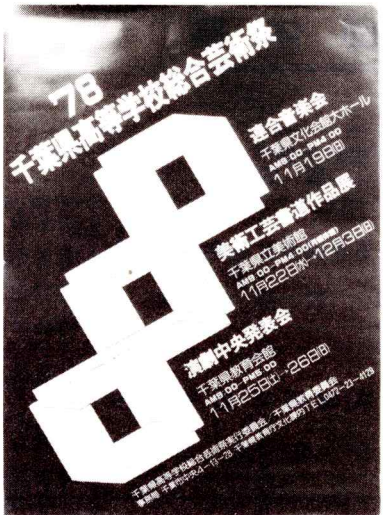
会 期 昭和53年11月22日～12月3日
主 催 千葉県高等学校芸術祭実行委員会
千葉県教育委員会

高等学校美術科、工芸科、書道科の一年間の平常授業での成果と、課外活動での成果及び教員の研究作品を展示し合うことにより、生徒は創作活動を刺激され、他校の状況を知り、教員は他校との比較で教育効果、方法について研究することを直接に目指し、間接には千葉県の芸術活動を昂揚することを目的とした。

参加状況

部 門	書 道	美術・工芸	計
生 徒	63校	60校	123校
教 員	59校	20校	79校
計	122校	80校	202校

印刷物 ポスター 36.4cm×51.2cm 500枚
目 録 B 5 1000枚

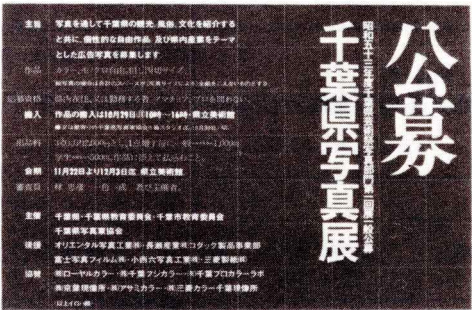


昭和53年度千葉県芸術祭

千葉県の観光・風俗・文化財写真展

会 期 昭和53年11月22日～12月3日
展示点数 119点

首都に隣接する本県は、開発の一途を歩み目まぐるしい変貌をとげつつある。失われつつある風土を、プロ写真家の秀れた作品を通し、広く県民に紹介した。



団 体 展

展 覧 会 名	内 容 等	会 期	展示点数
第5回全日本書の友の会 一般部書画展	千葉県・千葉市の書道を中心とし、加えて全国各地より参加し、その力量を競い合い千葉県書道文化の発展を計り、書道を通じて地域社会に貢献することを目的とした。	53.4.11 ～4.16	260
第1回新芸術協会 千葉支部展	新芸術至上主義による造形美術の探究・研鑽をもって真の芸術を開拓樹立し、画壇における最もオリジナルなギルドとして名誉ある足跡を記録することを目的とした。	53.4.18 ～4.23	66
第4回歩会彫刻展	県内に在住する作家が集まり、所属団体や流派にとらわれない自由な勉強と県下に作品を発表することを目的とするとともに、彫刻の本流に基づき美術文化向に寄与するものとした。	53.4.25 ～5.7	51
第5回千葉工芸展	千葉県及び近県作家による工芸作品を県民に鑑賞していただき、工芸に対する意識を高め、美術文化の発展に寄与するものとした。	53.4.25 ～5.7	75
千葉新協美術会展	県内に在住する会員の研究発表を目的とするものであり、油絵・水彩画・版画の作品を主に展覧した。	53.5.2 ～5.7	128
第23回二科千葉支部展	県美術文化振興のため広く県下の美術家及び児童より作品を公募し、同人と共に展覧した。	53.5.16 ～5.21	980
墨の県展	東洋の伝統としての水墨画を県下の人々に鑑賞の機会をもち、かつその啓蒙を目的とした。	53.5.23 ～5.28	275
独立美術千葉県在住者展	美術愛好者が一堂に会し、広く県民に独立美術の作品を見ていただくとともに、互いに研究する場とした。	53.5.30 ～6.11	63
精鋭展	各公募展に出品入選受賞者で、千葉県在住者による展覧会であり、気鋭の充実した作品の発表を行い、一層の精進をめざした。	53.5.30 ～6.11	70
千葉県書道協会展	県下の書道振興と会員の親睦をはかることを目的とした。	53.6.13 ～6.18	258

点数

50

66

51

75

128

980

275

63

70

258

展 覧 会 名	内 容 等	会 期	展示点数
新 槐 樹 社 千 葉 支 部 展	作品を広く県民並びに美術愛好者の鑑賞に供し、郷土の美術文化発展向上のための一翼となるべく開催した。	53.6.20 ～6.25	152
第 6 回 現 代 書 道 50 人 展 現 代 書 壇 代 表 名 作 展 千 葉 書 壇 秀 抜 展 千 葉 書 壇 新 進 展	全国展と併行して県内から秀抜された作品と新進気鋭の作家の合同展であり、現代書道界における最高の作品を一堂に集め、書道のより一層の興隆をはかった。	53.6.27 ～7.2	301
千 葉 美 術 シ ン ポ ジ ヴ ム & 青 枢 展	大作（3m×10m等）が多く、公募作品を含め、意欲に満ちた会員による作品を展覧することにより、千葉県の文化向上に寄与する目的とした。	53.7.4 ～7.16	266
千 葉 盲 学 校 陶 芸 展	児童・生徒の陶芸作品を展示することにより、自分たちの生活と能力を広く一般に理解を求め、社会とのつながりを深めた。	53.7.18 ～7.23	150
行 動 美 術 千 葉 展	行動美術展に出品する一般応募者ならびに会員の作品による地方展として開催した。	53.7.25 ～7.30	41
千 葉 市 水 墨 画 同 好 会 連 合 会 展	会員の作品を広く一般に紹介するとともに水墨画を振興することを目的とした。	53.8.1 ～8.6	390
第 4 回 児 童 合 同 美 術 展	児童の情操と美的感性の向上、各地域の児童の作品を通して相互交流をはかるとともに協会加盟の各絵画教室の指導水準の向上を目指した。	53.8.1 ～8.13	1,200
第 6 回 「明るく楽しい家庭づくり」ポスター・標語展	健全な青少年を育成するための運動の一環として「明るく楽しい家庭づくり」をテーマとした展覧会を開催し、より一層の普及と充実を図った。	53.8.8 ～8.13	1,000
千 葉 市 ア マ チ ュ ア 美 術 ク ラ ブ 展	千葉市民文化の向上と、豊かな潤いある生活をめざして日常楽しく制作している愛好者のための発表の機会とした。	53.8.15 ～8.20	200
日 本 習 字 千 葉 県 書 道 展	正しく美しい文字を目指し、日夜愛の習字を心に精進している県下書友の成果を発表し、斯界の批正を仰ぎ明日への糧とした。	53.8.22 ～8.27	580

展 覧 会 名	内 容 等	会 期	展示点数
子供と教師の作品展	児童作品（絵画・デザイン等）を発表し、美術教育の振興・発展を目的とするとともに教師の作品研修の場とした。	53.8.22 ～8.27	350
第8回いてふ会彫刻展	小・中・高・大学で美術教育にたずさわっている会員の教師としての資質を高めるため、日頃の研修の成果を発表し、御指導・御叱正を仰ぐ目的とした。	53.8.22 ～9.3	49
千葉県教職員美術展	千葉県教職員の美術的素養の向上を図り、図工・美術指導の研修に資する目的とした。	53.8.29 ～9.3	134
問われる表現展	抽象的な作品を制作しているグループの日頃の成果を発表し、抽象画の普及とともに、一般参観者の声を反映させ、今後の制作のかてとした。	53.9.5 ～9.10	25
文化書道千葉県連合会書道展	児童生徒の書技向上、情操教育を助長しながら正しい教育的・実用的書風を主として芸術性のある文学を書くことを目的として展示した。	53.9.5 ～9.10	346
静雅書道会千葉地区展	小・中学生の条幅作品を一堂に展示することにより、斯道の奨励をはかるとともに、情操教育の一助とした。	53.9.5 ～9.10	210
第7回写真千葉県展	県内全写真人の創意・創作の意欲にもえた作品を一堂に集め、県民文化の推進に写真を通じ、ゆたかな心とゆとりある社会を築く一助とした。	53.9.5 ～9.17	216
第18回白扇書道会展	会員や公募作品の発表をするとともに、中国の書や原拓を展示し、県民の鑑賞力を高め、また、会員の研究心を高めることを目的とした。	53.9.12 ～9.17	2,600
千葉78展	実験的な制作活動を行う美術家の交流をはかり、相互啓発をするとともに、県内美術文化の向上をはかった。	53.9.19 ～10.1	175
第8回新構造千葉支部展	地域文化向上のための一翼となり、かつ50年の伝統を誇る新構造展として、県内唯一無二の支部に協力参加を希望する地方作家の発掘と結集を願い、発表の場とした。	53.10.3 ～10.8	115

展 覧 会 名	内 容 等	会 期	展示点数
第 25 回 千 葉 県 勤 労 者 美 術 展	県内勤労者が余暇利用して、創作した美術品の発表の場を提供することによって、文化的教養の向上をはかった。	53.10.3 ～10.8	165
第 10 回 ファ ン シ ー 展	会員の技術を深め、多くの人々に作品を鑑賞してもらい、批評を受け、今後の制作活動の糧とすることを目的とし発表した。	53.10.3 ～10.8	102
千葉市小・中・養護学校 児童・生徒作品総合展	理科・美術・学校園・国語の各教科の学習成果を展示公開し、自立進展を図った。	53.10.10 ～10.19	4,500
第 9 回 千 葉 県 大 学 美 術 連 盟 展	絵画及び彫塑などの美術を媒体として、各加盟大学サークル間の親睦をはかり、研究活動の集大成を数多くの愛好家に批評していただき、今後の糧とするとともに芸術文化の振興を図った。	53.12.5 ～12.10	180
千 葉 展	各団体に所属する千葉県在住作家展であり、首都圏千葉にふさわしい中央画壇の活気ある現代美術を広く県民に紹介した。	53.12.5 ～12.10	82
第 23 回 こ ど も 県 展	次代を担う児童・生徒の美的情操を豊かにするとともに、創造性を高め、青少年の健全育成を図ることをねらいとした。	53.12.12 ～12.24	5,440
宮坂会・登龍社書初展	小・中・高各学年ごとに課題を決め、全員が同じ文字を書いた日本古来の伝統ある書初作品を展示し、文化向上を図ることを目的とした。	54.1.5 ～1.7	258
日 輝 展 選 抜 展	芸術の境界線をなくし、自由で壁や屏のない集まりをめざし、会員相互の融和と交流のために開催した。	54.1.5 ～1.15	126
葉 美 会 展	美術愛好者の団体である千葉県立美術館友の会会員が創作の楽しみを分かち合い、かつ実技講座における成果を併せて発表し、今後の糧とした。	54.1.9 ～1.15	170
PEOPLE OF THE CEDAR	カナダインディアンが、宗教儀式で使った面・トーテムポール・衣服などの作品を展示し、彼らの文化・芸術を紹介し、日加の理解と親善をはかる一助とした。	54.1.17 ～1.28	47

展 覧 会 名	内 容 等	会 期	展示点数
昭和53年度千葉大学教育学部美術科卒業制作展	卒業を目前にして、4年間の学習・研究の成果を作品を通して発表し、世の多くの方々の御指導・御叱正を仰ごうとして開催した。	54.1.23 ～1.28	67
昭和53年度千葉大学教育学部書道科学生書道展	日頃の学習・研究の成果を作品を通して発表し、世の多くの方々の御指導・御叱正を仰ぐため開催した。	54.1.23 ～1.28	69
第3回子ども造形展	幼児・児童のクレパス・水彩・コラージュ・紙版画・油彩をはじめ、各種の素材を利用した立体物の作品を発表し、今後の糧とした。	54.1.30 ～2.4	500
第31回千葉県小・中・高校書初展	全県下の小・中・高校生に書初展の課題を統一募集し、地方で審査するとともに中央で席書を行い、習字教育の向上に寄与することを目的とした。	54.1.30 ～2.4	634
静雅書道会選抜展	会代表作家及び中堅作家より選抜された漢字・かな・近代語の作品を一堂に展示。県内の父兄・会員が身近に触れることにより、斯道の発展を図った。	54.2.6 ～2.12	100
第11回習美会新春展	一般入場者に自分の好きな作品を選んで投票してもらい、高得者順に奨励し、好きな作品を選ぶことによって一般観覧者も絵画観賞の心を養う目的とした。	54.2.14 ～2.18	226
第4回千葉県民写真展	県下あらゆる地域分野で写真を趣味とするアマチュアカメラマンが、年に一度その力量を競い合い、写真文化の発展と写真を通じて地域社会に貢献する精神の涵養を目的として開かれた県内唯一の公募展であった。	54.2.20 ～3.4	377
第10回千葉市民美術展	日本画・洋画・彫塑・工芸・書道・写真・グラフィックデザインの7部門の公募展であり、千葉市における芸術文化活動の振興に資する目的とした。	54.3.8 ～3.25	1,135
第26回書星教育部展及び弥生展	小・中・高校生を対象とした条幅作品の展示をし、制作意欲の向上をはかるとともに、指導者の技術も合わせてはかる目的とした。	54.3.27 ～4.1	2,613

調査・研究

紀要第2号の発行

館員が日常の業務の上でのもろもろの問題について独自に関心を深め、研究してきたところの作家研究、あるいは、館運営上の諸問題について追求してみた。

美術館における二次資料等展示の現状と課題

市原 正 夫

美術館が単に美術作品の展示に、とどまらず、二次資料の取扱いについての問題が提起されている。

このことについて、博物館大会、文化振興会議等で論議され、さらに「公立博物館の設置及び運営に関する基準」や日本博物館協会による「博物館に関する基礎調査」のアンケートに基づき、これからの美術館の展示のあり方として、その具体化が検討されている。

本館で開催した特別展における、二次資料室を設定した経過と、その内容をとりあげ、多くの関係者の御批判と御指導を仰ぐことにしている。

今後の美術館のあり方として、利用者に親しめる展示がなされるべきで、広く学校教育・社会教育の場としても、幅広い展示計画をすべきであり、発展的には、鑑賞の場とともに、調査研究の機会ともなる二次資料展示課題として意義づけがなされている。

美術館における友の会運動

石 井 秀 雄

開かれた美術館とは何かとの課題を解決する一つの方策として、友の会のあり方を示した。昭和50年5月に足して以来、今日までに会員が1,000名を超えている。

発展の経過の中で、会員1人1人と密接なかかわり合いをもちながら、その結びつきの接点としての機能を揮わせることが、友の会の存在意義があるとまとめている。

活動の記録として、当初100名の会員が10万の予算で出発した。役員組織として、総務事業・親睦・広報の部を編成し、機関紙のしおさい・美術講演会・美術鑑賞バスの旅をはじめ、実技講座などを開催し、着実に歩を進めた。

今後の問題として、組織の拡大化・広報活動の充実・事業とその体制、更にボランティアの推進やモニター度が必要であることが友の会の歩みの記録をとおしてのべている。

フランス留学時代の黒田清輝

大 木 衛

黒田清輝が19歳の折、政治家を志して、フランス留学の途についた。パリでの生活中に、留学生であった、雅三や山本芳翠を通して、ラファエル・コランに師事することにより、法律学から画学へ変更することになった。

初期的には、父母や後見人などの反対もあったが、自己の強い画業への意欲と希望を、多くの書簡に託して、説得するとともに、西欧の人物や風景を精力的に描き、洋画への基礎と応用を摂取することがをした。

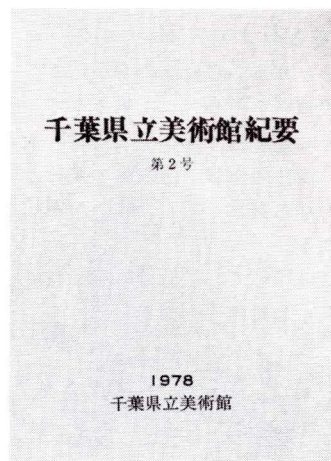
滞欧生活10年間、歳28歳で帰朝した。その間、フランスの生活、コラン氏との出逢い、洋画への転向などを、日記と書簡から理解を深めた。

画業に転向した条件を、幼年時代・パリ留学時代の生活から、要因を求め、黒田の青年時代に強い信念と面の強い愛情に支えられながら、画家としての成長していく姿を求めている。

模写について ―試論(一)画論―

小 野 禮 子

芸術は作家の個性・独自性が重視され尊重されることはもちろんである。といって、その作家が非常に個性で独自性を持っていても、それに作品に昇華結実していないと芸術家としては無意味であることはいうまでもない。



展示点数	
67	
69	
500	
634	
100	
226	
377	
1,135	
2,613	

い。つまり、どんな芸術でもその技法がしっかりしていないと、いかにすばらしい発想があってもそれを十分に表現することはできない。つまり、すぐれた芸術家ほど基礎的な技術の習得に年期を入れているといえよう。

伝統的な日本画の習画の基礎として、模写の方法が用いられてきたが、今日では模写より習画の道へ進むことは少なく、むしろ文化財保存の意味上から模写事業として扱えられ、それに従事した者が結果的に有益であったとする消極的な模写の在り方に変ってきているといえよう。

そこで、この模写について (1)模写の扱い方 (2)中国画論にみる模写 (3)日本画論にみる模写の項目をとり考えてみた。

浅井 忠をとりまく人々

前 川 公 秀

浅井 忠をとりまく幾つかの会がある。そのうち二十日会・十六夜会・黙語会が特に有名である。二十日会は、京都在住の洋画家を中心とした集まりで、はじめは美術研究所の設立を目的とした。十六夜会は、浅井の生前に弟子たちが中心となって集まることが計画されたが、浅井の突然の死により追想の会に変質したものである。また黙語会は、浅井の死後、遺稿集の発行と墓石の建立を目的とした会である。これらの会を通して、浅井が生涯どのような人々と交友を結んでいたかを知ることが、浅井の思想、あるいは芸術上の立場を知るための一方法であると思われる。

これらの会について、本館で所蔵されている資料により、各々の会の会員にはどのような人々がいたかを明らかにし、浅井 忠研究の一助としている。

浅井 忠の美術史 ～フランス留学時代の原風景～

高 橋 在 久

浅井 忠のフランス留学時代の画業は、日本近代美術史に光彩を添えた、すでに多くの先学によって評価されている。そこで「浅井 忠の美術史」を企図し、その歴史の陰影への接近を心がけた。その一端として、浅井のフランス留学時代の画業の原風景を探訪したフィールド・ノートから、その印象を点描することにした。

草稿・鍔金家香取秀真年譜

中 村 哲

千葉県出身で、日本鍔金工芸作家として、また、金史家として著名な香取秀真氏の年譜は、著書「歌集天之真髓」「歌集還暦以後」に記載されている以外は、「日本美術年鑑」(昭和29年版)に作品年表が記載されているのみである。

これらの著書等には、未記載事項があるので、本館で開催した特別展「香取秀真とその周辺」の資料を参考に、増訂を試みた。

房総ゆかりの画家たち

藤 川 正 司

房総にモチーフを求めた画家は数多い。古くは江戸時代の葛飾北斎、安藤広重等がいるが、特に明治以降は、洋画の発展と相俟って房総はますます画家にとって恰好の取材地となり、その結果、日本美術史上に残る傑作も生まれた。本館では、昭和49年度の特別展「描かれた房総」、あるいは昭和52年度の特別展「海と湖沼展」等によって、房総にゆかりの作品を展観したが、これらの展覧会を契機として、ここに画家と房総とのかかわりを年表として表わすことにした。この年表では、主として房総を訪れた画家に焦点をあて、関係事項を記している。また、これは、今後、充補改正していく性格のものであるが、今回は、とりあえず物故作家を対象に、明治初期から終戦まもない頃迄の関係事項を取り上げ紹介することとした。この他にも、多くの画家が房総を描いた作品を残しているが、制作年が不明のため、現在の時点では彼等の足跡を年表に記せるまでには至らなかった。今後の調査研究により、明らかにするものである。

B 5 版 83ページ 上質紙 1,000部

収蔵品目録の発行

この目録には、昭和53年3月31日現在で本館に収蔵された資料が記載されている。集録に当っては、作品と作家の背景資料と言うべき研究資料に分け、さらに、作品は日本画・洋画・彫塑・工芸・書・版画の順に分類した。

今後は、3～4年毎に集録し、その間の各年度の新収蔵品については年報にて紹介する。

B 5 版 52ページ アート紙 1500部

教育・普及

講演会

(1) 黒田清輝と明治絵画

講師 国立文化財研究所 美術部 主任研究官
陰里鉄郎氏

期 日 昭和53年5月6日

黒田がときに“近代洋画の父”と呼ばれるのは、黒田が日本の近代絵画の展開のうえに大きな役割を果たしたがためであるが、その果たした役割が大きければ大きいほど、後世からまたその功罪を問われねばならないことになる。黒田の遺作展がいまなおしばしば開催される理由であろう。と前置きされ、スライドを利用しながら、黒田と明治期の絵画について話された。

何よりも時代遅れの暗い色調でしか描くことのなかった旧い写真、国粹主義的風潮のなかで、歴史画的な画題主義の袋小路に入りこんで停滞していた日本の洋画界に、明るい光と雰囲気描写を画面に導入していた黒田の作風と、市民社会の自由闊達な画家風をもった人物の登場は衝撃的でさえあった。

異質な文化的伝統の移植がきわめて困難な事柄であることは、どこでも、いつの時代でも変わらない。明治の洋画、というより日本の近代絵画（日本画を含めて）が、外光派と呼ばれた印象派の手法を加味した明るい色彩世界をたずさえた、黒田清輝・久米桂一郎の登場によって大きく変化していったことは疑いないところである。



(2) 近代日本美術の青春

講師 国立国際美術館長
本間正義氏

期 日 昭和53年10月8日

夭折の夭は、年若く美しいという意味である。折はそれを折るということで、夭折は若死を意味する。従って夭折という字を使う時は、ただの若死でなく、それが美しく死ぬのでなくてはならぬようなひびきがある。それから布衍するわけではないが、夭折の画家といった時には、若死したが故に、その芸術の中に、長寿を全うした画家の場合には見られない、なにか特別の美しさ、味わいといったものが、あらわれてくるように思えてならない。

新しく洋風美術が摂取されて、近代美術としての扉が開かれ、視覚の科学性を強調した明治、個人的であるが故に、国家をこえての普遍的な芸術の心を示した大正、自由をうたう市民精神が一般に浸透し、自由な実験も活発となった昭和、夭折は即ち青春といえるのだが、その背景となった時代そのものも、近代日本美術史における青春とよぶべきものであると考えられる。

ともあれ、洋画が摂取され約半世紀にして、はじめて自らのものとしての日本化を果たした彼らの業績は、壮年へとターンする正に近代美術の青春の果程標としても考えられ、さらに、青春の充実の反面、屈曲と混乱の物語りもつづられていたことを示していると語られた。



講習会

「みる・かたる・つくる」という本館の事業の一環として、実技講座を実施しているが、本年度は、七宝焼・てん刻の講座を新に加えた。

(1) デッサン入門講座

期 日 第1期 昭和53年6月3日・4日

第2期 昭和53年7月8日・9日

第3期 昭和53年9月9日・10日

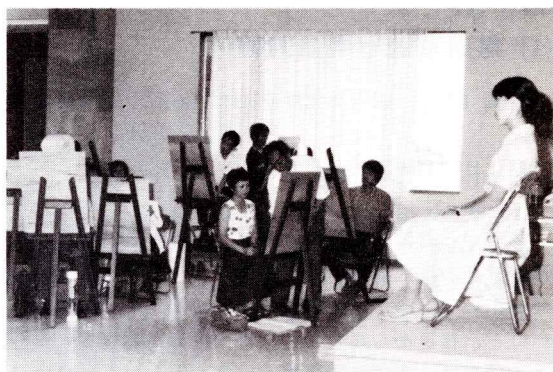
講 師 第1期 千葉大学助教授 戸田 健夫氏

第2期 千葉大学助教授 太田 洋三氏

第3期 千葉大学教授 海老沢巖夫氏

参加者数 各期40名

内 容 石膏像をモデルに、形や明暗のとらえ方、質感や量感の把握など絵画表現の基礎的な学習をねらいとして行った。



(2) 七宝焼講習会

期 日 昭和53年12月2日・3日

講 師 千葉大学教授 長南 光男氏

参加者数 40名

内 容 アクセサリーや室内装飾品として、人気のある七宝焼の制作技法の習得を通して、手づくりの楽しさ、使う喜びを味わうことのできる基礎講座であった。



(3) てん刻入門講座

期 日 昭和54年2月17日・18日

講 師 日展審査員 古川 悟氏

謙慎書道会評議員 白取 弘苑氏

参加者数 40名

内 容 てん刻の歴史や種類を知るとともに自らの手で印材を刻することにより、てん刻の技法や材料を知り、彫る楽しみ、使う喜びを味わうことができる初心者のためのものだった。



第2回 美術館夏季大学 ―美術入門講座―

“みる・かたる・つくる。”美の広場としての活動の一環として、“美術を見る眼。”を養うため、日本美術の歴史的な推移や多様化した現代美術などの理解を深める講座「美術館夏季大学」を昨年度に引続き開講した。

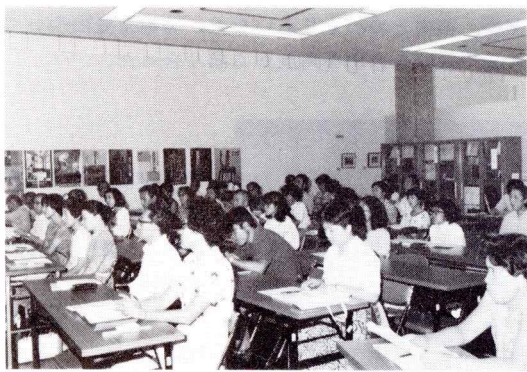
今回は、専門的知識と一般教養の修得を目的として、日本近代工芸、書の流れと、その時代に代表される作品の見方やさまざまな表現様式の理解を中心テーマにおき、あわせて日本近代洋画のルーツへの紀行や美術品の取扱いと保存の仕方などを課題に開講した。

期 日 昭和53年8月4日～5日

参加者数 59名

内 容

日 時	講 師	課 題	内 容	日 時	講 師	課 題	内 容
8月4日	午前 高橋 在久 (本館副館長)	日本近代洋画のルーツ	1 明治時代における日本人留学生 2 バリー郊外グレー村について 3 黒田清輝とグレー村 4 浅井忠とグレー村 5 近代日本洋画史上のグレー村の存在	8月5日	午前 堀江知彦氏 (二松学舎大学教授)	書芸の歴史と見方	1 文字とは 2 日本の文字 3 日本人が初めて漢字に接した時期 4 「漢漢倭又国王」金印出土 5 漢字から仮名の誕生 6 文字から「書」へ 7 日本の書の過去と現代 8 現代の書の種々相 9 古典派の作家についての疑問
	午後 金子量重氏 (大妻女子大学講師)	近代工芸の歴史と見方	1 土びんと湯のみの発生―水と人の生活 2 その変遷・渡来文化による・風習の変化による 3 その定着・原因と目的 4 近代作家の制作活動		午後 大 木 衛 (本館学芸課長)	美術品の取扱いと保存の仕方	1 美術工芸品保護の沿革と現状 2 美術工芸品の概要とその取扱い 3 美術工芸品の保存の仕方 4 その他



洋画実技講座

友の会との共催で行われたもので、美術館の“つくる”活動の一つとして制作の楽しみを味わいながら、年間を通じ系統的な実技指導を行った。本年は基礎コース（初心者）と研修コース（経験者）とに分けて実施した。

(1) 基礎講座

講 師 千葉県立船橋高等学校教諭 根岸茂行氏
受験者数 40名（各回同一人）

日程及び講習内容

回	月 日	講 習 内 容
1	4. 15	石膏像・デッサン
2	5. 6	〃
3	6. 10	〃
4	6. 24	静物・デッサン・淡彩
5	7. 15	ヌードデッサン
6	7. 16	〃
7	8. 12	着衣デッサン・淡彩
8	9. 3	ヌードデッサン・彩色
9	10. 14	風景写生（港）
10	11. 12	静物水彩

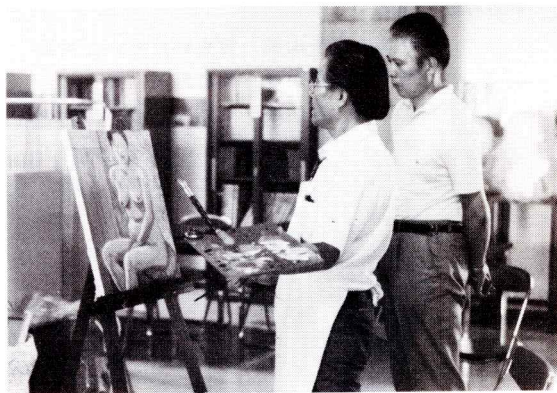


(2) 研修講座

講 師 千葉大学教授 武内和夫氏
受講者数 40名（各回同一人）

日程及び講習内容

回	月 日	講 習 内 容
1	4. 9	人物デッサン
2	5. 7	〃
3	6. 11	〃
4	7. 2	ヌードデッサン
5	7. 30	ヌード油彩Ⅰ
6	8. 6	〃
7	9. 2	ヌード油彩Ⅱ
8	9. 3	〃
9	10. 1	着衣・油彩
10	10. 7	〃



見学会

友の会と共催で行われ、美術作品や文化財をたずねながら同好の親睦を深めるものである。

(1) 若葉に萌える北総台地に歴史と自然の美を探る

期 日 昭和53年5月14日

参加者数 100名

五月晴れの風薫る一日、芝山はにわ博物館、開港間近の成田空港、自然の中の千葉県立房総風土記の丘、農民のためと身を捨てた義民宗吾を奉る宗吾霊堂を訪れた。



(2) 錦秋の甲斐路を行く

期 日 昭和53年11月4日・5日(1泊2日)

参加者数 50名

紅葉の富士山麓、雪をいただいた秀峰富士の全容が見られる好天に恵まれた二日間、昇仙峡、山梨県立美術館、恵林寺、ワイン工場、富士五湖、古沢岩美術館、白糸の滝、富士美術館を訪ねた。



千葉県立美術館報の発行————— B 5 各3,500部

VOL. 5 No. 1 (53.4.24発行 8頁)

- 目次
- ・観潮台
 - ・新年度を迎えて三つの夢
 - ・黒田清輝展
 - ・東山魁夷展を想う
 - ・美との巡りあい語る

VOL. 5 No. 2 (53.7.20発行 8頁)

- 目次
- ・観潮台
 - ・房総の書芸展
 - ・夏のひとときを ～第2回千葉県移動美術館
 - ・黒田清輝展を顧みて
 - ・準備進む「夭折の画家たち」
 - ・美術普及室をご利用ください
 - ・第2回美術館夏季大学

VOL. 5 No. 3 (53.9.10発行 8頁)

- 目次
- ・観潮台
 - ・夭折の画家たち
 - ・かつての千葉中学図画教師
～堀江正章とその周辺展開催近づく～
 - ・第12回現代美術選抜展
 - ・県展三十回を迎える
 - ・待望の美術普及棟着々と計画進む

VOL. 5 No. 4 (53.12.15発行 8頁)

- 目次
- ・観潮台
 - ・堀江正章 人とその芸術
 - ・中央の秀作を一堂に
「第12回現代美術選抜展」
 - ・浅井忠像が完成
 - ・千葉県展30年史の完成
 - ・「夭折の画家たち」展を終えて

VOL. 5 No. 5 (54.2.14発行 8頁)

- 目次
- ・観潮台
 - ・県内ゆかりの作家の動向を知るために
～第2回千葉県秀作美術展～
 - ・常設収蔵作品展「風景の美」
 - ・開催近づく 芹沢銈介展
 - ・県民アトリエとしていよいよ着工
 - ・「堀江正章とその周辺」展の資料コーナーより
 - ・昭和54年度普及事業予定



友の会(葉美会)

(1) 運営方針

- ① “みる・かえる・つくる” 美術館活動に積極的参加の促進
- ② 会員加入の促進 (目標1,000名)
- ③ 美術館普及棟の建設促進

(2) 組 識

人数 会員数 1222名
名称 千葉県立美術館友の会

●千葉県立美術館友の会役員

職 名	氏 名	分 担
名誉会員	松 戸 節 三	
会 長	鈴 木 民 三	
副 会 長	市 原 正 夫	
〃	永 田 澄 子	事 業
〃	江 尻 幹 雄	親 睦
事務局長	大 里 功	総 務
監 事	始 関 妙	広 報
〃	三 宅 寿美子	親 睦
理 事	安 田 博 亮	総 務
〃	新 城 瑠璃子	〃
〃	田 中 環	事 業
〃	押 尾 禎 一	広 報
〃	平 野 元三郎	親 睦
〃	村 上 十 吉	事 業
〃	大 藤 敬 美	親 睦
評 議 員	新 城 瑠璃子	
〃	大 高 鐘 蔵	
〃	大 内 俊 雄	
〃	安 達 園 子	
〃	仲 田 茂 房	
〃	永 田 澄 子	
〃	三 宅 寿美子	
〃	押 尾 禎 一	
〃	大 藤 敬 美	

職 名	氏 名
評 議 員	高 橋 喜一郎
〃	藍 野 正 和
〃	酒 井 千代子
〃	日 暮 幸 子
〃	松 本 康 雄
〃	西 田 葆
〃	大 塚 輝 子
〃	下 田 祐 子
〃	加 藤 信 子
〃	長谷川 芳 衡
〃	近 藤 愛 子
〃	日 下 めぐみ
〃	香 川 美智子
〃	湯 浅 幸 一
〃	梶 村 真 子
〃	梶 美貴枝
〃	中 村 綾 子
〃	小 室 守 一
〃	戸 辺 艶 子

(3) 事 業

① 友の会報 (しおさい) の発行および、講演会、講習会、美術を語る会、見学会を本館と共催で行った。

② 第3回美術館友の会作品展

会 期 昭和54年1月9日～1月15日

展示点数 170点

実技講座での作品や家事や勤務の合間に制作した苦心の力作を持ちより、“つくる”活動から“みる”“かたる”活動を通して、美術愛好者の親睦を深め、楽しさを分かち合う機会とした。

No.12 (53.61発行6頁)

- 目次・絵筆に託す楽しみ ～洋画実技講座始まる～
- ・若葉に燃える北総台地に歴史と自然の美を探る
～第6回友の会旅行～
 - ・ミニミニニュース
 - ・会員だより、街に美をひろう(3)

No.13 (53.8.22発行6頁)

- 目次・酷暑にもめげず
- ・見よこの瞳のかがやきを
 - ・ミニミニニュース
 - ・ひろば、街に美をひろう(4)

No.14 (53.11.6発行6頁)

- 目次・秋空に港を描く写生会
- ・日本美術の源流韓国を訪ねて
 - ・もっと素直に美をみつめよう
 - ・ミニミニニュース
 - ・街に美をひろう(5)

No.15 (53.12.25発行6頁)

- 目次・会員も入選県展第三十回記念展
- ・錦秋の甲斐路に行く
 - ・ミレーの絵にあこがれて
 - ・ミニミニニュース

No.16 (54.2.26発行8頁)

- 目次・描く楽しみ、努力の跡
- ～第三回葉美会展開く～
 - ・秀作美術展について
 - ・ミニミニニュース
 - ・私と画家聖人



昭和53年度事業一覧

月	本館企画の展覧会	普及事業	団体展
4	6 常設展（第1期） ・浅井忠とその周辺 ・3人の版画家-瑛九・浜口陽三・池田満寿夫の世界		第5回全日本書の友会一般部書道展 （4/11～4/16） 第1回新芸術協会千葉支部展 （4/18～4/23） 第4回歩会彫刻展 （4/25～5/7） 第5回千葉工芸展 （4/25～5/7）
5	27 特別展 近代日本洋画の巨匠 黒田清輝展	・講演会(5/6) - テーマ - ー黒田清輝と明治絵画ー ・見学会(北総方面)(5/14) ・第1回美術を語る会(5/20)	千葉新協美術会展 （5/2～5/7） 第23回二科千葉支部展 （5/16～5/21） 墨の県展 （5/23～5/28） 独立美術千葉県在住者展 （5/30～6/11） 精鋭展 （5/30～6/11）
6	28	・デッサン入門講座(1期)(6/3～4)	千葉県書道協会展 （6/13～6/18） 新槐樹社千葉支部展 （6/20～6/25） 第6回千葉県書壇秀抜展 （6/27/7/2）
7	18 千葉県移動美術館 20 房総の書芸展	・デッサン入門講座(2期)(7/8～9) ・第2回美術を語る会(7/22)	千葉美術シンポジウム&青板展 （7/4～7/16） 千葉盲学校陶芸展 （7/18～7/23） 行動美術千葉展 （7/25～7/30） 千葉市水墨画同好会連合会展 （8/1～8/6） 第4回児童同美術展 （8/1～8/13）
8	30 1	・第2回美術館夏季大学(8/4～5) 友の会主催（会員制） 洋画実技基礎講座(4/15・5/6・6/10・6/24・7/15・7/16・8/12・9/3) 洋画実技研修講座(4/9・5/7・6/11・7/2・7/30・8/6・9/2・9/3)	第6回「明るく楽しい家庭づくり」 ポスター・標語展 （8/8～8/13） 千葉市アマチュア美術クラブ展 （8/15～8/20） 日本習字千葉県書道展 （8/22～8/27） 子どもと教師の作品展 （8/22～8/27） 第8回いてふ会彫刻展 （8/22～9/3）
9	17 21 特別展 夭折の画家たち 10 19	・デッサン入門講座(3期)(9/9～10) ・第3回美術を語る会(9/30)	千葉市教職員美術展(8/29～9/3) 問われる表現展(9/5～9/10) 文化書道千葉県連合会書道展 （9/5～9/10） 静雅書道会千葉地区展 （9/5～9/10） 第7回写真千葉県展(9/5～9/17) 第18回白扇書道会展 （9/12～9/17） 千葉78展 （9/19～10/1）

月	本館企画の展覧会	普及事業	団体展
10	9月21日から 19 特別展 夭折の画家たち ～近代日本の青春譜～	・講演会(10/8) テーマ ー近代日本美術の青春ー ・映画会(10/14) ー近代日本絵画の流れー	第8回新構造千葉支部展 (10/3～10/8) 第25回千葉県勤労者美術展 (10/3～10/8) 第10回ファンシー展 (10/3～10/8) 千葉市小・中・養護学校児童生徒作品 総合展 (10/10～10/19) 第30回 県展 (10/28～11/19) 第10回千葉県高等学校芸術祭 美術・工芸・書道展(11/23～12/3) 昭和53年度千葉県芸術祭 写真展 (11/23～12/3)
11		・見学会(11/4～5) (静岡・山梨方面) ・第4回美術を語る会(11/11)	
12	7 堀江正章とその周辺	・七宝焼講習会(12/2～3)	第9回千葉県大学美術連盟展 (12/5～12/10) 千葉展 (12/5～12/10) 第23回子ども県展(12/12～12/24)
1	9 15 19 21 特別展－文化庁提供－ 第12回現代美術選抜展	・第5回美術を語る会(1/13)	宮坂会・登龍社書初展 (1/5～1/7) 日輝展選抜展 (1/5～1/15) 葉美会展 (1/9～1/15) PEOPLE OF THE CEDAR (1/17～1/28) 昭和53年度千葉大学教育学部美術 科卒業制作展 (1/23～1/28) 昭和53年度千葉大学教育学部書道 科学生書道展 (1/23～1/28) 第3回子ども造形展 (1/30～2/4)
2	8 常設展(第2期) 風景の美 第2回 千葉県秀作美術展	・てん刻入門講座(2/17～18) ・第6回美術を語る会(3/3)	第31回千葉県小・中・高校書初展 (1/30～2/4) 静雅書道会選抜展 (2/6～2/12) 第11回習美会新春展 (2/14～2/18)
3	4 15日まで	友の会主催(会員制) 洋画実技基礎講座(10/14・11/12) 洋画実技研修講座(10/1・10/7)	第4回千葉県民写真展 (2/20～3/4) 第10回千葉市民美術展 (3/8～3/25) 第26回書星教育部展及び弥生展 (3/27～4/1)

利用状況

昭和53年度入館者一覧表

昭和54年 3月31日現在(53.4.1～54.3.31)

種別 月	開館 日数	個人			団		体				人 数 合 計	備 考
		一般成人	大・高生	中・小生	一般成人		大・高生		中・小生			
					人 数	団数	人 数	団数	人 数	団数		
4	24 ^日	人 5,595	人 362	人 1,602	人 352	6	人 0	0	人 75	2	人 7,986	} 特別展 「黒田清輝展」
5	26	16,371	992	1,323	109	3	131	2	651	6	19,577	
6	26	4,363	361	631	237	6	94	2	427	3	6,113	
7	26	4,378	344	910	248	7	0	0	301	5	6,181	
8	27	5,397	246	2,280	112	2	0	0	234	4	8,269	
9	26	7,951	532	2,810	207	4	253	3	746	5	12,499	} 特別展 「夭折の画家たち」
10	19	10,806	636	6,956	349	11	0	0	457	9	19,204	
11	25	12,005	1,099	3,133	571	16	941	7	269	3	18,018	
12	21	6,040	1,013	3,206	168	5	104	3	344	10	10,875	
54年 1	23	5,063	679	1,178	70	2	0	0	157	2	7,147	特別展 「現代美術選抜展」
2	24	7,217	276	2,107	74	3	0	0	28	1	9,702	
3	27	9,024	570	2,577	227	6	0	0	370	4	12,768	
計	294	94,210	7,110	28,713	2,724	71	1,523	17	4,059	54	138,339	1日平均 320人
累計	1,240	535,035	(開館以来)									1日平均 431人

地域別入館者状況

昭和53年 3月31日現在 (53.4.1～54.3.31)

種別 月別	開館日数 (日)	県内		県外		その他	
		千葉市(人)	その他の県内(人)	東京都(人)	その他の県外(人)	外国(人)	不明(人)
4	24	3,878	2,196	175	132	0	1,605
5	26	6,090	3,866	316	184	20	9,101
6	26	3,515	1,986	226	114	0	272
7	26	3,478	2,258	222	114	12	97
8	27	4,777	2,816	161	180	10	325
9	26	7,644	4,343	252	143	0	117
10	19	14,354	4,441	224	172	13	0
11	25	10,391	7,033	413	152	29	0
12	21	4,185	6,443	115	129	3	0
54年 1	23	4,703	2,196	152	77	19	0
2	24	6,219	3,151	153	172	7	0
3	27	9,197	3,158	226	174	13	0
						126	11,517
計	294	78,431	43,887	2,635	1,743		11,643

日誌抄

- | | | | |
|---------|--------------------------|---------|----------------------|
| 4月5日 | 福井県立美術館より来館 | 19 | 埼玉県教育庁美術館準備班来館 |
| 21 | 千葉県立美術館・博物館協議会 | 26 | 千葉県美術館資料審査委員会 |
| 27 | 特別展「黒田清輝展」始まる | 27 | ソ連カリーニン市長来館 |
| | | 28 | 第30回千葉県美術展始まる |
| 5月4日 | 埼玉県立博物館、関野前東京国立文化財研究所長来館 | 11月4日 | 緑化推進委員会よりの寄贈樹木植樹式 |
| 6 | 講演会「黒田清輝と明治絵画」陰里鉄郎氏 | 4・5 | 秋の美術鑑賞バスの旅（静岡・山梨方面） |
| 14 | 春の美術鑑賞バスの旅（北総方面） | 1泊2日 | |
| 18 | 横瀬文化庁記念物課長来館 | 7 | 福島県教育庁文化課より来館 |
| | 千葉県博物館協会役員会 | 9 | ソ連文化省一行来館 |
| 20 | 第1回美術を語る会 | 11 | 第4回美術を語る会 |
| 25 | 千葉県博物館協会総会 | 13 | 第30回千葉県美術展買上げ審査会 |
| | | 16 | 山口県文化課より来館 |
| 6月2日 | 松永埼玉県副知事一行来館 | 18 | 浅井忠像除幕式 |
| 3・4 | 第1期デッサン入門講座 | 28 | 第2回千葉県秀作美術展選考会議 |
| 7 | 埼玉県県民室長一行来館 | 30 | 和歌山県立美術館より来館 |
| 13 | 山梨県議会教育厚生委員会より来館 | | |
| 21 | 沼津市文化財審議会、長崎県議会より来館 | 12月2・3日 | 七宝焼講習会 |
| 27 | 群馬県管財課長来館 | 7 | 企画展「堀江正章とその周辺」始まる |
| 30 | 千葉県立美術館・博物館長会議 | 15 | 千葉県立美術館展示室利用調整会議 |
| | 北海道立近代美術館より来館 | 20 | 千葉県立美術館・博物館協議会 |
| 7月4日 | 千葉県立美術館協議会 | 1月8日 | 千葉県立美術館協議会 |
| 8・9 | 第2期デッサン入門講座 | 9 | 特別展「第12回現代美術選抜展」始まる |
| 12 | 青森市教育委員会より来館 | | 千葉県博物館協会役員会 |
| 18 | 千葉県移動美術館始まる（松戸市文化ホール） | 10 | 埼玉県立博物館より来館 |
| 20 | 企画展「房総の書芸展」始まる | 13 | 第5回美術を語る会 |
| 22 | 第2回美術を語る会 | 16 | カナダ大使館、神奈川県立博物館より来館 |
| | | 19 | 常設収蔵作品展「風景の美」始まる |
| 8月1日 | 千葉県移動美術館始まる（千葉県立総南博物館） | 27 | 千葉県立美術館友の会役員会 |
| 3 | 都道府県教育長協議会第四部会一行来館 | | |
| 4・5 | 美術館夏季大学 | 2月1日 | 青森県立郷土館より来館 |
| 9 | 千葉県博物館協会役員会 | 6 | 大分県土木建築課より来館 |
| 28 | 学芸員実習開始（5名） | 7 | 石川県土木部営繕課より来館 |
| | | 8 | 企画展「第2回千葉県秀作美術展」始まる |
| 9月9・10日 | 第3期デッサン入門講座 | 17・18 | てん刻入門講座 |
| 13 | 宮城県生活環境部県民課より来館 | 20 | 京都市美術館より来館 |
| 16 | 大分県教育庁文化課より来館 | 21 | 大分県芸術会館より来館 |
| 21 | 特別展「夭折の画家たち」始まる | 22 | 香川県企画部土地対策課より来館 |
| 23 | 特別展映画会 | | |
| 30 | 第3回美術を語る会 | 3月3日 | 第6回美術を語る会 |
| | | 8 | 兵庫県教育委員会文化財課より来館 |
| 10月8日 | 講演会「近代日本美術の青春」本間正義氏 | 13 | 千葉県美術館資料審査委員会 |
| 14 | 特別展映画会 | | 奈良県文化会館より来館 |
| | | 16 | 宮城県生活環境部美術館準備委員会より来館 |
| | | 29 | 茨城県水戸市教育委員会社会教育課より来館 |

関係令規

1. 博物館管理規則

昭和45年12月25日教育委員会規則第22号

目 的

第1条 この規則は、教育機関設置条例（昭和32年千葉県条例第4号）第20条に規定する博物館（以下「館」という。）の管理に関し必要な事項を定めるものとする。

（開館時間）

第2条 館の開館時間は、午前9時から午後4時30分までとする。

2 館の長（以下「館長」という。）は、必要があると認めるときは、前項の規定にかかわらず、開館時間を変更することができる。

（休館日）

第3条 館の休館日は、次のとおりとする

- 一 定期休館日 月曜日（その日が国民の祝日に關する法律（昭和23年法律第178号）第2条に規定する日に当たるときは、その翌日）
- 二 国民の祝日に関する法律に規定する日
- 三 年末休館日 1月1日から1月4日まで
- 四 年末休館日 12月26日から12月31日まで
- 五 臨時休館日 特別の事情により、館長が休館を必要と認めた日

2. 前項の休館日であっても、館長が特に必要と認めた場合は、館の全部又は一部を開館することがある。

（入館の制限）

第4条 館長は、次の各号の一に該当する者に対して入館を禁じ、又は退館を命ずることができる。

- 一 特別展覧会を観覧しようとする者で、所定の観覧券を所持しないもの
- 二 適当な指導者、保護者又は付添人のない6歳に満たない者
- 三 てい酔者、伝染病患者その他観覧者に不快の感を与えると認められる者

（観覧券等）

第5条 館の特別展覧会観覧券は、別記第1号様式とする。

2. 団体（20人以上の場合をいう。）で観覧しようとするときは、あらかじめ団体観覧申込書（別記第2号様式）により、館長に申し込まなければならない。

（禁止行為）

第6条 入館者は、次に掲げる行為をしてはならない。

一 展示品に手をふれること及び展示室でインク、墨汁類を使用すること。

二 許可なくして展示品を模写し、又は撮影すること。

三 所定の場所以外の場所において喫煙又は飲食すること。

四 その他他の入館者の妨げになるような行為をすること。

（損害の賠償）

第7条 館長は、入館者が館の展示品、建物若しくは備品等をき損し、又は汚損したときは、現品又は相当の代価をもって弁償させることができる。

（委 任）

第8条 この規則の施行に関し必要な事項は、教育長の承認を得て、館長が定める。

附 則

この規則は、昭和46年1月15日から施行する。

別記様式（省略）

2. 使用料及び手数料条例（抜粋）

昭和31年3月31日条例第6号

（趣 旨）

第1条 県が徴収する使用料及び手数料（以下「使用料等」という。）に関しては、別に規定するもののほか、この条例の定めるところによる。

（使用料等の徴収）

第2条 県が所有し、又は管理する行政財産及び公の施設（以下「財産等」という。）の使用並びに特定の個人のためにする事務（以下「事務」という。）に関し、法令及び他の条例に規定するもののほか、当該事務を依頼しようとする者から手数料を徴収するものとする。

（種類及び額）

第3条 前条の規定により使用料等を徴収する財産等及び事務の種類並びにその使用料等の額は別表第一に掲げるとおりとする。

（中 略）

別表第一（第3条第1項抜粋）

財産又は事務の種類	手数料	区 分	単 位	額
博 物 館	入場料	特別展覧会	1人1回につき	300円以内

（以下略）

3. 展示室使用料

昭和50年4月1日千葉県教育委員会指示第71号

1. 千葉県立美術館展示室の使用料については、使用及び手数料条例第5条第3項に基づき減免することとし、当分の間次表のとりの額とする。

室 名	面 積	使 用 料 午前9時から午後5時まで	
		観覧料無料、 展示物販売を しない場合	観覧料有料又は 展示物販売を する場合
第一展示室	438㎡	4,000円	左の倍額
第二展示室	400	4,000	"
第三展示室	469	4,500	"
第四展示室	403	4,000	"
第五展示室	824	8,000	"
第六展示室	330	3,000	"
第七展示室	567	5,500	"
全 室	3,431	33,000	"

ただし、県及び県教育委員会が共催ないし後援する場合並びに国又は他の地方公共団体の主催ないし共催する行事に係る使用の場合は無料とし、その他県教育委員会教育長が特に教育的文化的意義を認める行事に係る使用の場合は上記の半額とする。

2. 千葉県立美術館展示室の使用の許可に関する取扱いは、別紙「千葉県立美術館展示室の使用許可に関する取扱要綱」によるものである。

●千葉県立美術館友の会会則

(名 称)

第1条 本会は、千葉県立美術館友の会という。(略称、葉美会)

(事 務 所)

第2条 本会は、事務局を千葉県立美術館内におく。

(目 的)

第3条 本会は、千葉県立美術館(以下「館」という。)の活動に協力し、楽しいふんい気のなかで、教養を豊かにし、美術文化の向上をはかり会員相互の親睦を深めることを目的とする。

(事 業)

第4条 本会は、前条の目的を達成するため次の事業をおこなう。

- 1 館の展覧会の見学鑑賞
- 2 講演会、講習会、研究会等
- 3 館外見学会
- 4 機関紙等の編集刊行
- 5 その他目的達成に必要な事業

(会 員)

第5条 本会は、会の目的に賛同するものをもって組織する。

1. 会員には次の特典がある。

- ①館の主催又は共催による展覧会観覧の優待
- ②美術館報「みる・かたる・つくる」ならびに友の会機関紙の配布
- ③本会発行の図録等の配布及び割引購入
- ④本会事業への参加

2. 本会活動に協力し、賛助会費を納めたものは賛助会員とする。(会員の加入・退会)

第6条 本会に加入する場合は申込書に入会金(500円)を添えて事務局に提出し、会員証の交付を受ける。退会届際は退会届を提出する。

(役 員)

第7条 本会に次の役員をおく。

会長1名 副会長3名(ただし内1名は美術館長があたる)

理事 若干名 事務局長1名 監事2名 評議員 若干名

1. 会長・副会長・理事・事務局長・監事の選出は評議員会において推挙する。

2. 役員の任期は2年とする。ただし再任は防げない。

(役員等の任務)

第8条 本会の役員の仕事は次のとおりとする。

1. 会長は本会を代表して会務を総理し、会議を召集し、その議長となる。
2. 副会長は会長を補佐し、会長事故あるときはこれを代理する。
3. 理事は会の運営にあたる。
4. 事務局長は会務を処理する。
5. 監事は本会会計の監査をする。

(顧問・名誉会員)

第9条 この会に顧問及び名誉会員をおくことができる。顧問及び名誉会員は評議員会で推挙する。

(支 部)

第10条 地域、並びに職域ごとに20名以上の会員を有する場合は支部をおく。

(評議員会)

第11条 各支部より20名につき1名の制で推せんされた代表と賛助会員及び講座代表をもって評議員会を構成する。評議員会は毎年1回以上開き、事業計画、予算、役員の決定その他の重要方針を決議する。

(会 費)

第12条 本会の普通会員は毎年度当初に年額1500円の会費を納入する。

1. 5月以降の入会者については1ヵ月ごとに100円を減減するものとする。ただし減減金額は900円を限度とする。

(経 費)

第13条 本会の経費は会費、寄附金、事業収益金、その他の収入をもってあてる。

(会計年度)

第11条 本会の会計年度は毎年4月1日にはじまり、翌年3月31日におわる。

(職 員)

第15条 本会の事務局職員は館に勤務する者以外から、会長が委嘱する。

(付 則)

1. 本会の会則は評議員会で出席者の過半数の同意を得なければ変更することができない。

2. 本会則は昭和50年6月28日より施行する。

●昭和51年5月29日一部改正 ●昭和52年4月21日一部改正

●昭和53年4月20日一部改正

利 用 案 内

- 開館時間** 午前9時より午後4時30分まで
- 休 館 日** ・月曜日（ただし、月曜が祝日のときは開館し、翌日休館）
・年末年始（12月26日～1月4日）
・展示替等のため、必要があるとき。
- 入 場 料** ・無料（ただし、特別展は有料）
- 団体観覧** ・団体で来館されるとき、あらかじめご連絡あれば作品等の解説をします。

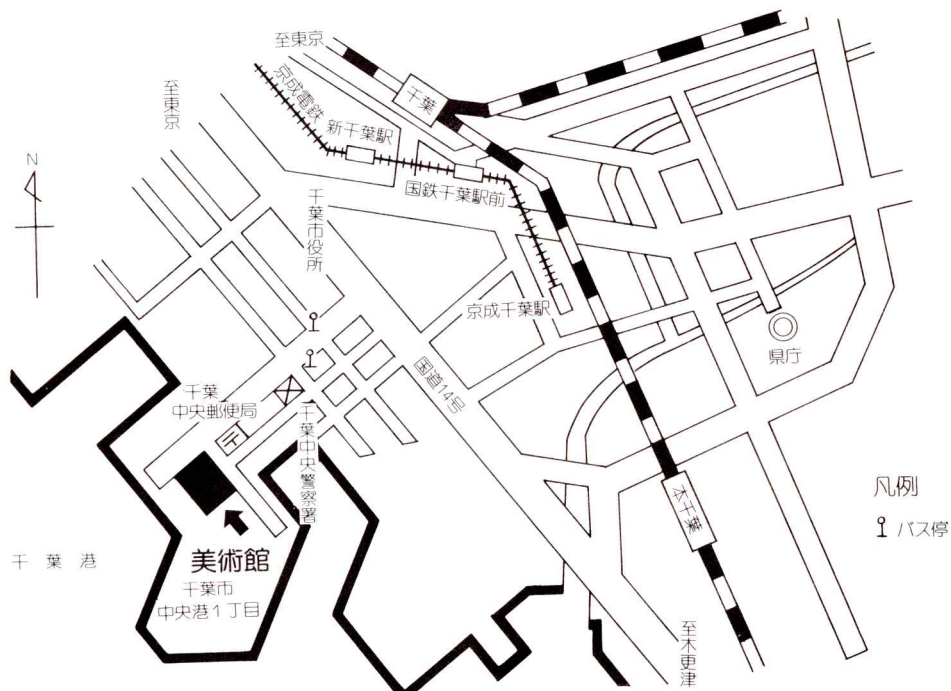
交 通 案 内

国鉄千葉駅前バス停③④番より「千葉市役所行」小湊京成、中央各バスで終点下車、徒歩約10分・⑦番「新港行」小湊、京成バスで中央署前下車、徒歩約6分

※日曜・祝日に限り下記のとおりバスが運行されています。

千葉駅発・そごうデパート前	美術館発・玄関北側
9:40	9:55
10:10	10:25
10:40	11:00
11:15	12:25
12:40	12:55
13:10	13:25
13:40	14:20
14:35	14:50
15:05	15:30
16:45	16:00

案 内 図



みる・かたる・つくる

千葉県立美術館年報(昭和53年度)

発行 千葉県立美術館

〒260 千葉市中央港1-10-1

TEL 0472 (42) 8 3 1 1

印刷 正文社

奏
新
介
てい

和53年度)
術 館
-10-1
3 1 1
社





